

アチェの想い

津波・開発・紛争をめぐる過去、現在と未来



名古屋学院大学

国際文化学部・外国語学部

目次

はじめに	人見泰弘 3
第一章 スタディツアー概要	5
スケジュール	7
お世話になった方々	8
参加者名簿	8
第二章 訪問先の記録	9
アチェとは一興味深い歴史のなかにあるアチェ	山本泰裕 11
バンダ・アチェとサバン島一自然災害と環境保全	後藤大志・深川開斗 13
五感すべてで感じた異国の土地	深川開斗 14
アルムスリム大学との交流一学生から学ぶ日本のよさ	杉本萌 17
アルムスリム大学・ホームステイ一たくさんの人びとの出会い・気づき	後藤大志 19
一期一会一インドネシアでの出会い	神納和希 20
アチェの人びとのやさしさ一たくさんの出会いをとおして	杉本萌 22
大学訪問とはじめてのホームステイ	田中将平 23
アルムスリム大学で学び、気づかされたこと	深川開斗 25
ホームステイで見つけた本当の自分一アルムスリム大学を訪れて	水谷奈津子 26
アチェの人びとの優しさにふれて一ホームステイ、アルムスリム大学について	安井都々美 29
人のあたたかさ一アチェで感じたもの	山本泰裕 31
隔離された集落での被害	神納和希 33
津波を乗り越えみえたもの一津波の被害とその後	神納和希 34
村の声から考える支援一実際の声から考える本当の支援	杉本萌 36
開発で苦しむ村とアチェ一本当の国際協力とは？	水谷奈津子 39
わたしたちの生活の裏一故郷を奪われた人びと	後藤大志 42
インドネシアへ行き変わったわたしの価値観一見たことのない真実	深川開斗 44
故郷を返して一日本人が知るべきこと	水谷奈津子 46
紛争被害を乗り越えて	安井都々美・田中将平 49
現地で紛争の話聞いて一アチェの苦しみ	田中将平 53

傷つけられた心—アチェ、紛争について	安井都々美 54
支援の裏側—闘い続けるアチェの人びと	山本泰裕 56
ロヒンギャ難民との出会い—アチェから学んだこと	杉本萌 59
第三章 スタディツアー資料.....	61
スタディツアー報告会.....	63
写真コーナー	65
おわりに.....	佐伯奈津子 69

はじめに

本書は、名古屋学院大学国際文化学部・外国語学部が2015年8月17日から28日にかけて実施したインドネシア・スタディツアーの成果報告書である。学生たちは、12日間の日程でインドネシア・アチェ州を訪れ、住民への聞き取りや体験学習を重ねつつ、津波・開発・紛争といったグローバルイシューについて学んできた。

アチェ州と聞けば、まずは長く続いた中央政府との国内紛争を思い浮かべる人も多いただろう。背景には、資源開発をめぐる国内外の複雑な利害関係が埋め込まれていた。そして、2004年のスマトラ島沖地震による甚大な津波被害をひとつの契機として、紛争は終結へと向かった。和平協定が結ばれて10年が経過したアチェのいまを学ぶ、スタディツアーとなった。

ここでは、引率教員のひとりとして、スタディツアーで感じたことを2つだけ、記しておきたい。

ひとつは、今回のスタディツアーが徹底して、住民の視線から国際協力のありようを考えてきたことである。各国政府や多国籍企業といったアクターは、たしかに途上国に開発と援助をもたらしてきた。しかしながら、それらを受け取る地域社会や住民の視点に立てば、開発と援助は必ずしもスムーズに受け入れられるとは限らない。開発と援助が向かう先には、その土地に暮らす人びとの生活があり、歴史がある。これらを見過ごすべきではないことを、改めて確認することになった。

もうひとつは、津波・開発・紛争のつめ跡は、容易には消し去ることができないという事実だ。アチェを訪れると、かつて紛争や津波に見舞われたことすら気づかせないほど、街は活気にあふれているように感じる。しかし、ひとたび住民と話をすれば、家族や故郷、自分の人生の一部を失ったという事実、わたしたちは向き合うことになる。津波も開発も紛争も、彼らにとっては決して過去の話ではなく、その歴史と現実のなかで、住民は今を生きている。そうした経緯を知ること、復興を成し遂げてきたアチェの人びとの力強さを実感する機会ともなった。

それぞれの訪問先の記録や学生の感想などは本書を読んでもらうことにして、本書の構成のみを記しておこう。

本書は、3つの章から構成される。第一章では、スタディツアーの概要として、12日間の行程が記録されている。つづく第二章では、アチェ州訪問の記録がまとめられている。津波・開発・紛争というグローバルイシューを軸に据えつつ、ア

チェの概要、州都バンダ・アチェとサバン島訪問記、アルムスリム大学との交流、津波・開発・紛争それぞれの影響を受けた住民への聞き取り、ロヒンギャ難民キャンプ訪問記という 7 つのトピックが論じられている。各節では、学生がそれぞれに訪問先の記録と感想を執筆した。第三章では、帰国後に実施した成果報告会の記録など、スタディツアーの資料が収録されている。

最後になるが、インドネシア・スタディツアーは、本書の「おわりに」を執筆した佐伯が全体を企画し、人見がその補助を担った。ツアーには、国際文化学部・外国語学部の学生 9 名が参加している。

本書を通じて、学生たちの学習成果とともに、アチェの人びとの力強さを感じてもらえれば幸いである。

2016 年 1 月
人見 泰弘

第一章 スタディツアー概要



津波で流された発電船は津波のつめ跡を伝える記念公園となっている
(バンダ・アチェにて)

スケジュール（2015年8月17日～28日）

日付	内容
8月 17日（月）	<u>移動</u> 8:00 中部国際空港駅（名鉄）改札口前案内所周辺に集合 10:15 中部国際空港→13:25 香港国際空港（キャセイ・パシフィック航空 CX533 便） 16:00 香港国際空港→19:50 クアラルンプール国際空港（同 CX729 便）
18日（火）	<u>移動</u> 10:30 チェックアウト 13:15 クアラルンプール国際空港→13:45 バンダ・アチェ スルタン・イスカンダル・ムダ空港（エア・アジア AK423 便）
19日（水）	<u>サバン（ウエ島）見学</u> 朝 バンダ・アチェ ウレ・レ港→サバン バロハン港 サバン（ウエ島）見学 キロメートル・ゼロ、日本軍塹壕、観光開発現場など
20日（木）	<u>津波のつめあと見学と移動</u> 午後 サバン バロハン港→バンダ・アチェ ウレ・レ港 バンダ・アチェ市内見学 津波で流された発電船公園、ウレ・レ港、バイトウラフマン大寺院など バンダ・アチェ→ビルン県（約5時間） アルムスリム大学ゲストハウス
21日（金）	<u>アルムスリム大学訪問、学生との交流</u> 学長表敬訪問、サマンの踊り（ユネスコ無形文化財）練習など ホームステイ
22日（土）	<u>アルムスリム大学訪問、学生との交流</u> 学生交流会など ビルン県→ロスマウエ市（約1時間）
23日（日）	<u>北アチェ県村落訪問</u> 開発影響住民グループ訪問（アルン LNG 社：プラント周辺、ロスマウエ市バンダ・サクティ郡ウジョン・プラン村、アセアン・アチェ肥料社：北アチェ県デワンタラ郡バンカ・ジャヤ村、ニサム郡チョッ・マンボン再定住集落）
24日（月）	<u>北アチェ県村落訪問</u> 紛争被害女性グループ訪問（北アチェ県クタ・マクムル郡グハ・ウレエ村） ロヒンギャ難民キャンプ訪問
25日（火）	<u>北アチェ県村落訪問と移動</u> 津波被災地（北アチェ県サムドゥラ郡マタン・スリメン集落） 午後 ロスマウエ→バンダ・アチェ（約6時間）
26日（水）	<u>移動とマラッカ見学</u> 6:30 チェックアウト 8:55 バンダ・アチェ空港→11:20 クアラルンプール国際空港（AK422 便） クアラルンプール国際空港→マラッカ（約2時間30分） マラッカ市内見学 マラッカ王宮博物館、独立記念博物館、セントポール教会、クライストチャーチ
27日（木）	<u>クアラルンプール観光</u> マラッカ→クアラルンプール クアラルンプール観光
28日（金）	<u>帰国</u> 8:00 チェックアウト 10:30 クアラルンプール国際空港→14:40 香港国際空港（CX790 便） 16:15 香港国際空港→21:10 中部国際空港（CX532 便） 解散

お世話になった方々

NGO「Jari Aceh（公正のための女性ネットワーク）」

Khairul Hasni（ハイルル・ハスニ）さん

Nurjubah（ヌルジュバ）さん

アルムスリム大学のみなさん

とくに、ホスト・ファミリーとして学生を受け入れてくださった

Amiruddin Indris（アミルディン・イドリス）学長

H. Yusri Abdullah（ユスリ・アブドゥラ）理事長

Chairul Bariah（ハイルル・バリア）先生

Kamariah（カマリア）先生

Zahara（ザハラ）先生

そして「サマンの踊り」を教えてくださいました

Sanggar Mirah Delima（サンガル・ミラ・デリマ）のみなさん

宗教法人・名古屋モスクほか、多くのみなさん

参加者名簿

参加学生

- 2年： 杉本 萌（SUGIMOTO Moe）（外国語学部 国際文化協力学科）
寺本 京平（TERAMOTO Kyohei）（外国語学部 国際文化協力学科）
水谷 奈津子（MIZUTANI Natsuko）（外国語学部 国際文化協力学科）
安井 都々美（YASUI Tsuzumi）（外国語学部 国際文化協力学科）
山本 泰裕（YAMAMOTO Yasuhiro）（外国語学部 国際文化協力学科）
- 1年： 後藤 大志（GOTO Taishi）（国際文化学部 国際協力学科）
神納 和希（JINNO Kazuki）（国際文化学部 国際協力学科）
田中 将平（TANAKA Shohei）（国際文化学部 国際協力学科）
深川 開斗（FUKAGAWA Kaito）（国際文化学部 国際協力学科）

引率教員

- 佐伯 奈津子（SAEKI Natsuko）
人見 泰弘（HITOMI Yasuhiro）

第二章 訪問先の記録



アルムスリム大学学生との記念写真
(アルムスリム大学にて)

アチェとは

～興味深い歴史のなかにあるアチェ～

山本 泰裕 (YAMAMOTO Yasuhiro)

アチェ州

アチェはインドネシア共和国のスマトラ島北の端に位置する州である。西はインド洋、北はアンダマン海、東はマラッカ海峡に面し、南は北スマトラ州と接する。自然がたくさんあり、野生動物が多く生息している。面積は、約 5 万 5393 平方キロメートル、人口は約 520 万人（2009 年統計）であり、おもにアチェ人が暮らしている。そのほかにジャワ人、ガヨ人をはじめとするマレー系諸民族がいる。宗教はイスラーム教がほとんどを占め、98%もの人びとがイスラーム教徒である。共通言語はインドネシア語であるが、アチェ人がつかうアチェ語も日常的に話されている。そのほかに大きく分けて 3 つの言語（ガヨ・アラス語、アヌック・ジャメー語、タミアン語）のほかにも各地に方言がある。

アチェの歴史

アチェは、東南アジアでもっとも早くイスラームを信じるようになった地域である。アチェはインドネシアのなかでもイスラームの信仰が強い地域として知られている。そしてアチェの人びとは礼儀にはとても厳しく、礼儀正しい人びとである。そしてアチェ州はインドネシア国内で唯一イスラーム法が適用されている地域である。たとえば、人前で過度な露出をしてはいけなかったり、結婚するまでに性交渉をしてはいけなかったりというものである。外国人であるわたしたちも、服装などに、十分配慮しなければならなかった。

この地にあった「アチェ王国」は、16～18 世紀ごろ、金やコショウの貿易で栄えた。オランダの植民地支配に対して、最後まで抵抗した歴史もある。しかし、1945 年の日本の敗戦をきっかけに、オランダの植民地だった地域がインドネシアとして独立する。このときアチェ州も、このインドネシアの一部となった。

インドネシアは中央集権的で、アチェは独自の歴史や文化が配慮されていなかった。とくに、1970 年代にはじまった天然ガス開発の利益は、インドネシアの首都であるジャカルタに吸い上げられ、地元アチェには還元されなかった。このような問題への不満から、1976 年に自由アチェ運動という組織が、アチェのインドネシアからの独立を宣言した。アチェの独立宣言に対して、インドネシアは軍事力をもってこの運動を抑え込もうとしたため、結果的に大規模な紛争へと拡大していく。紛争中は、アチェの武装勢力だけではなく、多くの民間人が殺害された

り、拷問されたりした。その紛争では多くの民間人が犠牲になったのである。

この紛争は、2004年末に起きたスマトラ島沖地震・津波をひとつの契機として終結することになった。この津波で、震源地であったアチェ州は甚大な被害を受け、20万人ともいわれる人びとが亡くなった。この未曾有の大災害を受け、2005年に自由アチェ運動とインドネシア政府は和平会議を開き、紛争の終結を迎えた。このようにアチェには多くの興味深い歴史がある。

バンダ・アチェとサバン島

～自然災害を環境保全～

後藤 大志 (GOTO Taishi)

深川 開斗 (FUKAGAWA Kaito)

バンダ・アチェの魅力

わたしたちは、中部国際空港を出発し、香港、クアラルンプールを経由して、8月18日にバンダ・アチェに到着した。バンダ・アチェはインドネシア共和国のスマトラ島北端に位置するアチェ州の州都であり、アチェ州で最大の都市だ。バンダ・アチェはかつて、インド、アラブなどと、金やコショウなどを交易して栄えたアチェ王国の首都だった。

アチェ州を移動する際、モスクを何回も見かけた。モスクは、イスラーム教の礼拝堂のことだ。集落に必ず一つはある。

アチェは2004年スマトラ島沖地震の被害に遭った。そのときの津波によって建物の上や海とは離れた陸地に船が流され、いまも残されている。そこを見に行き、津波の影響を学んだ。

サバン島の意味

翌19日、バンダ・アチェから船に乗り、サバン島に向かった。サバン島は大小1万7000の島々からなるインドネシアの領域を示す言葉に「サバンからメラウケまで」というものがある。この言葉どおり、サバンは、インドネシアのもっとも北西に位置する島であり、「キロメートル・ゼロ」という記念碑がある。

サバン島漁業問題

サバン島では、環境NGO「インドネシア環境フォーラム」に案内され、漁業の問題について話を聞いた。訪問したブラワン村は、サンゴ礁のなかにとっても色のきれいな小魚をとり観賞用として売り、生計を立てている。しかし、よその漁民が爆弾、毒などをつかった違法な漁をおこない、たくさんの魚やサンゴ礁が死んでいるという。この村の人びとは、NGOと協力し、こういった漁業からサンゴ礁を守る働きをしている。

日本軍の建設した要塞跡

太平洋戦争のとき、インドネシア最北端に位置するサバン島は、日本海軍の重要な拠点となった。日本軍は、サバン島に要塞や砲台を建設した。日本軍に占領されたサバン島は、連合軍に空爆されて甚大な被害を受けたという。

日本軍は、太平洋戦争のとき、東南アジア一帯を占領し、東南アジアの人びとを労務者として働かせたり、食料を強制的に徴収したりした。日本軍の兵士も多く戦争で、また戦争が終わってからも日本に帰ることなく死んでいったという。物資が届かず餓死したり、マラリアなどの病気にかかったりしたためだ。

* * *

五感すべてで感じた異国の土地

深川 開斗 (FUKAGAWA Kaito)

スタディツアーの 2、3 日目、バンダ・アチェとサバン島を訪れた。わたしは、今回のスタディツアーがはじめての海外だった。バンダ・アチェには、中部国際空港セントレアから香港を経由して向かった。バンダ・アチェの空港に着いたとき、まず匂いが違うと感じ、ここは、日本でないことを意識した。バンダ・アチェからサバン島までは船で 1 時間かかった。その船では、サバン島に観光に行く人たちが多く見られた。わたしたちは、インドネシアの案内本だけをもち、片言のインドネシア語でその人たちとコミュニケーションをとろうとした。すると、その人たちは笑顔で嫌な顔せず、いろいろな言葉や現地のことをわたしたちに教えてくれ、移動するあいだもよい時間を過ごせた。

サバン島ではまず日本軍が建設した要塞跡を訪問した。インド洋からマラッカ海峡の入口に位置するサバン島は、海軍の重要な拠点になった。要塞は、とても山奥にあり、要塞からの景色は海が見渡せて綺麗だった。要塞の周りを見るときにもなく、本当に戦争のためだけに作られたのだと肌で感じる事ができた。佐伯先生から日本軍が太平洋戦争のとき東南アジア一帯を占領したことを聞いた。



サンゴ礁保全に取り組むブラウン村の人びと

日本軍は、東南アジアの人びとを労働者として働かせたり、食糧を強制的に徴収したりしたそうだ。たくさんの日本軍の兵士も戦争で亡くなったが、そうではない民間人も同じよう亡くなっていることを考えると戦争は凄まじいものだと感じた。

サバン島はインドネシアでもっとも北に位置する島である。そのことを示しているキロメートル・ゼロという記

念碑も訪れた。わたしは、そこではじめて本場のココナッツ・ジュースを飲んだ。味は思っていたより甘くはなく、美味しいとは思えなかった。

サバン島の漁業問題についても学ぶ機会があった。サバン島は海が綺麗でサンゴ礁が有名だ。わたしたちが訪れたブラワン村の人びとは、サンゴ礁のなかにいるたくさんの魚を獲って生計を立てていた。しかし、よそからきた漁民が多くの魚を獲るために爆弾や毒をつかう違法な漁業をしてしまうため、サンゴ礁が死んでしまう。ブラワン村の人びとは、生きていくためにサンゴ礁が必要なので、サンゴ礁を守っていた。サバン島の海では観賞魚がとれると聞いた。その魚を売る金額の価格は日本では考えられないほど安かったため、日本との違いを金銭面でも感じられた。

サバン島で 1 泊した宿舎は、とても眺めがきれいな場所だった。そこでは海水浴をして現地の若者とコミュニケーションをとった。わたしはうまく英語をつかってコミュニケーションをとることができなかったが、話したい気持ちとジェスチャーで意思が通じ合うことができ、とても楽しかった。自分たち以外に日本人がいない空間ははじめての体験であり、とても新鮮だった。



日本軍が建設した要塞跡

アルムスリム大学との交流

～学生から学ぶ日本のよさ～

杉本 萌 (SUGIMOTO Moe)

アルムスリム大学とは

アルムスリム大学は、アチェ州ビルン県の唯一の私立大学だ。1929年に創立され、2003年に大学化された。大学には、農業学部、教育学部、コミュニケーション学部、社会政治学部、短大には助産学部がある。アルムスリム大学では、アチェと日本の文化を紹介し合い、お互いの理解を深めることができた。

苦労した「サマンの踊り」

アルムスリム大学との交流初日、アルムスリム大学の学生から、アチェの伝統的文化である「サマンの踊り」を学んだ。「サマンの踊り」とは、13世紀にアチェ州のガヨ・ルウス地方のイスラーム指導者であるシェク・サマン師によって編みだされたものでユネスコ無形文化遺産の緊急保護リストに登録されている。いっせいに手が動く様子から、「千の手のダンス」と呼ばれている。アルムスリム大学の学生グループは、日本、韓国、オーストラリアで公演をおこなったことがあるそうだ。

わたしたちは一人ひとり、学生たちからサマンを学んだ。説明はすべて英語でされ、加えてジェスチャーで習うことになった。わたしは、リズムが速くなるにつれて手がついていけなくなり、「サマンの踊り」は、とても難しく思った。

学生との交流

交流2日目には、公開でセミナーが開かれ、アルムスリム大学の学生や地元の高校生が参加した。まずわたしたちが、日本についてプレゼンテーションをおこなった。学生生活、いじめや自殺、過労死などの労働問題といった日本の社会問



アルムスリム大学学生から「サマンの踊り」を習う

題、祭りやスポーツ、アイドルなど日本の文化について発表した。アチェの学生たちは、どの話も真剣に聞いている様子であった。アチェの学生からは、社会問題となっている労働問題について政府の支援はあるのかという質問を受けた。アチェの学生が一番驚いていたのは、お金の話だ。時給が1000円というのはアチェでは、とても高い金額にあたる。日本の一年間の学費は、インドネシアの人びとにはとても払える金額でないことがわかった。

日本で社会問題となっている自殺についての質問もあった。家族や近所の人びとと支えあって生活しているインドネシアの人びとにとっては、信じられないことだという。

また、原爆についての質問も受けた。「原爆についてなにか学習をしているのか」といった質問だ。遠く離れたインドネシアの人が原爆を知っていたことにも驚いたが、それほど世界に衝撃を与えたできごとであることがわかった。広島原爆についてわたしたちは中学校で学習する程度でしかない。広島に住む学生たちは、毎年追悼式をおこない、詳しく学習をおこなっている。日本人だからこそもっと海外の人びとに原爆の恐ろしさを伝えられるように学習していくべきではないかと感じた。

アルムスリム大学の学長からは、お互いの良いところをもち帰って、とりいれてほしいという話があった。アチェの良い部分は、礼儀正しいといった部分だと思う。わたしたちは、その部分をとりいれていきたいと考える。また、アチェの学生は、目標に向け一生懸命にがんばっているという印象を受けた。アチェには、日本語を学ぶ高校生が多くいた。わたしたちにも日本語をつかって質問してくれた。その姿からも一生懸命に日本語を学んでいることが伝わってきた。日本の大学に入ることを目標にしている高校生もいて、嬉しく思った。

つづいて、わたしたちは文化交流の一環として、日本のアイドルのダンスを披露した。インドネシアでも馴染みのあるアイドルであったため、学生たちみんな喜んでくれる様子であった。練習は大変であったが、喜んでもらったのでよかった。

最後にわたしたちはアチェの学生グループに交じり、「サマンの踊り」を披露した。成功したという出来栄にはならなかったが、この踊りの練習を通して学生たちと仲良くなれた。言葉がなかなか通じないために、不安もあったけれども、楽しむことができた。アチェの人びともわたしたちの「サマンの踊り」に喜んでくれる様子であった。

わたしたちは、サマンを披露したときにアチェの伝統的な衣装を着た。男子の衣装の模様はアチェの扉をあらわしている。アチェの伝統的な家屋は扉が小さく、なかが広がっている。一度信頼関係ができると、なんでも許しあえるというアチェの気質をあらわしているようだ。

アチェの学生たちは、わたしたちのことを盛大に歓迎してくれ、とても嬉しく

感じた。交流を通して日本の豊かさも実感することができた。日本の豊かで良い部分を大切に、学長が話していたようにアチェの良い部分をとりいれたい。

また、このアチェとの交流を通して海外から見た日本をたくさん知ることができた。海外の人が日本のどこの部分に注目し興味をもつのかわかった。また、学生からの質問で深く考えさせられた。原爆の話では、原爆をまったく知らない次世代にどうやって原爆の恐ろしさを伝えていくのか考えることができた。交流を通して、日本の良さやこれからわたしたちがやるべきことは何かなど考えさせられた。

* * *

アルムスリム大学・ホームステイ

～たくさんの人びととの出会い・気づき～

後藤 大志 (GOTO Taishi)

滞在 5 日目と滞在 6 日目に、アルムスリム大学を訪れた。アルムスリム大学では、大学公認の学生芸能グループから「サマンの踊り」を教えてもらった。学生グループは「サンガル・ミラ・デリマ」という団体で、日本、韓国、オーストラリアで公演をおこなったことがあるそうだ。

サマンという踊りはおもに手をつかい、踊る人たちがタイミングをそろえてみんなで一斉に踊る。手をつかうだけの踊りに見えていたけれども、複雑な動きや速い動きなどがあり、覚えるのが大変だった。アルムスリム大学の学生とは言葉もなかなか通じなかったが、少しの英語や身振り手振りで一生懸命教えてもらい、わたしたちは最後まで踊りを覚えることができた。

夜は、学部長の家にホームステイをした。そこで驚いたことは 2 回夜ご飯があることだ。日本では歓迎のときでも 1 回だが、インドネシアでは歓迎の意味を込めて 2 回ご飯を食べる。1 回目の夜ご飯は家で食べた。やはり、インドネシアの家庭料理であり、辛いものが多く、カレーのような味付けの料理がたくさん出てきた。2 回目のごは



みんなで「サマンの踊り」を実演

んは外食となった。2回も夜ご飯があることをわたしたちは知らず、1回目のごはんで満腹にしてしまったことにより、2回目の食事ではアイスティーしか飲むことができなかった。学部長の息子と話すことができ、さまざまなインドネシア語やインドネシアでもあるスポーツや映画の話をとくさん聞き、日本の映画もインドネシアにあるなど、いままで知らないことがあり、とてもおもしろいと思った。

アルムスリム大学との交流2日目に日本の踊りとしてAKB48の「恋するフォーチュンクッキー」を踊った。その次に前日覚えたばかりの「サマンの踊り」を踊った。ところどころ曖昧な部分があったため間違えてしまうことが多々あったが、踊りを通して学生たちとの絆が深まった気がした。

その踊りが終わると質疑応答があった。そのなかでこの名古屋学院大学とアルムスリム大学の交換留学の話が出た。アチェ州は日本に比べてとても物価が低いので、簡単には留学ができない。だから、交換留学のように留学ができるようになることはとてもいいことだ。わたしたちのように留学ができたり、何不自由なく大学に通えたりするということは、とても恵まれていると実感した。大学やホームステイで身近に人びととふれ合い、アチェのさまざまな優しさにふれることができた。

一期一会

～インドネシアでの出会い～

神納 和希 (JINNO Kazuki)

わたしにとって、スタディツアーがほぼはじめての海外渡航だった。けれども、インドネシアの人たちの明るく、接しやすい人柄のおかげで、スタディツアーはわたしにとって一生忘れられない経験となった。スタディツアーで、わたしはとくさんの人たちと交流することができた。とくに深く交流したと思うのは、ユネスコ無形文化遺産の緊急保護リストにも登録されている「サマンの踊り」を教えてくれたアルムスリム大学の学生である。関わったすべての人たちのなかでも、とくにいろいろなできごとがあった。

まずアルムスリム大学の学生たちは、わたしたちに「サマンの踊り」を教えてくれた。複雑な動きもある「サマンの踊り」をはじめて見たとき、こんな難しい踊りを1日で覚えられるわけがないと思っていた。しかし、学生たちはわたしたちに付きっ切りで、丁寧に「サマンの踊り」を教えてくれた。わたしはインドネシア語を話すことができないし、学生も日本語を話すことができないため、簡単

なインドネシア語と英語、そしてスマートフォンのアプリをつかい、日本語に翻訳しながら教えてくれた。しだいに踊りを覚えていくうちに、学生とも仲良くなることができた。

そして翌日は、日本で準備していたプレゼンテーションとAKB48の「恋するフォーチュンクッキー」と「サマンの踊り」を披露した。プレゼンテーションもダンスも、見てくれた学生たちの様子を見る限り、喜んでもらえたと思う。練習してきてよかったと思った。「サマンの踊り」も間違えた箇所はいくつかあったけれども、なんとか成功したと思う。

そして、学生たちと昼食を食べたあと、午後には海まで移動をして砂浜でお菓子を食べて交流した。そのときに突然、後ろから誕生日ケーキが運ばれてきた。その日はわたしの誕生日だったからだ。あれほど多くの人たちに祝ってもらえると思っていなかったもので、とても嬉しくて、忘れられない思い出が増えた。サプライズしてくれた佐伯先生に感謝だと思った。学生たちと仲良くなることができたので、今度は日本に来て欲しいし、交換留学の制度ができあがって欲しいと思った。

夜には理事長一家のお宅にホームステイをさせていただいた。最初は、インドネシア語を話すことができないのでホームステイに不安を感じていた。しかし、理事長一家の温かいもてなしにより、不安もすぐなくなった。まず理事長はみずからオーナーであるエビの養殖所に連れていってくれた。エビを獲るところを見せてくれ、そのエビを夕食にしてくれた。インドネシア語でおいしいという単語は知っていたので、おいしいと伝えると笑いながら喜んでくれた。言葉が伝わる嬉しさを知ることができたと同時に、それだけしか伝えられない悔しさも感じた。食後は理事長のお孫さんとパソコンの翻訳サイトで会話をしたりした。そして次の日の朝になり、短い時間ではあったが、わたしたちを迎えてくれた理事長一家と別れるのは悲しかった。今度インドネシアに行くときもホームステイをしたいと思った。

さまざまなインドネシアの人びとと交流するなかで、いつの間にか自分もインドネシアのことが大好きになっていた。とても礼儀正しい人が多いインドネシアは素晴らしい国なので、日本との交流がもっと盛んになるといいと思う。



アチェで迎えた誕生日

アチェの人びとのやさしさ

～たくさんの出会いをとおして～

杉本 萌 (SUGIMOTO Moe)

待ちに待った学生との交流

わたしは、異国の地の学生たちが何を学び、どのような学生生活をおこなっているのかとても興味があった。なのでずっと、この日を楽しみにしていた。

1日目は、学生たちから「サマンの踊り」を習った。わたしは、いままでこうだった経験がなかったので、不安もあったが、学生たちはとてもフレンドリーであった。また、英語もうまく、すぐに仲良くなれた。

2日目は、アルムスリム大学を訪れ、公開セミナーと文化の交流をおこなった。日本についてのプレゼンテーションでは、たくさんの学生たちが日本について質問をしてくれた。日本に関心をもっている学生たちが多く、嬉しく思った。日本語で質問をしてくれる学生もいた。その学生は、日本語を学び日本への留学を目標にしていた。日本についてよいイメージをもち、留学したいといわれ、嬉しく思った。

1日目に習った「サマンの踊り」を学生たちに交じり、アチェの人びとの前で披露した。「サマンの踊り」は、スピードが早くなるにつれて手がついていけなくなり、とても大変であった。サマンの発表は成功したといったときにはならなかったが、アチェの人びとが喜んでくれたため、よかった。学生たちは外国人が珍しく、写真が好きであった。わたしたちが移動するときでも写真をとったり、発表のあとには学生たちから写真を求められた。照れ臭かったが、学生たちの優しさや気さくさが伝わってきた。

本当の家族のように

わたしがホームステイしたのは、お母さん、お父さん、おばあちゃん、娘3人、息子1人という家庭だった。はじめに驚いたことは、家のつくりだ。日本とはだいぶ異なっており、平屋でとても天井が高かった。わたしたちは、お母さん、娘さん、娘さんの友だちとで海へ行った。お母さんは、とても元気がよく友だちみたいな感覚でわたしたちと遊んでいた。波に乗ってジャンプをするといった遊びをおこなった。わたしたちを楽しませようとしてくれたお母さんに感謝したい。

夕食を食べ終えたあとは、近所の人が少ないだけ集まり話をした。英語の翻訳アプリをつかいながら、会話をした。ホームステイ先のお父さんは、裁判官をやっているそうだ。わたしたちに、仕事のときに着ている服を見せてくれた。娘さん

とは、たくさんの写真を撮って遊んだ。日本の写真を見せたり、本当の家族のように楽しく会話をして、楽しむことができた。寝る前にお母さんは、おでこにキスしてくれた。本当の娘のようにわたしたちに接してくれ、このホームステイは忘れられない経験となった。別れのときには、家族みんなが見送りにきてくれた。家族の優しさふれ、インドネシアの文化にもふれることができた。一生忘れることのない経験となった。

大学訪問とはじめてのホームステイ

田中 将平 (TANAKA Shohei)

わたしたちは、21日と22日に、アルムスリム大学を訪問した。アルムスリム大学の訪問では、ユネスコ無形文化遺産の保護リスト入りした「サマンの踊り」を学生たちから教えてもらった。わたしは短時間で覚えるのが苦手で、非常に難しく感じた。

アルムスリム大学では、自分が思っていた以上に、英語が通じなく、ほぼジェスチャーで学生たちとコミュニケーションをとっていた。わたしは、インドネシア語はあいさつ程度しかできないので、相手が何を言っているのかまったくまったく分からなかった。けれども、笑顔は絶えることがなく最後まで楽しく交流ができた。

本番のステージ発表のときは、緊張してぎこちない踊りになったが、なんとか成功というかたちで終えることができた。本番前の最後の練習では、みんなもいつも以上に本気モードになっていて、絶対に成功させてやるという気持ちになった。もちろん観客は全員外国人で、人前で踊るといのははじめての経験なので、プレッシャーがすごかった。この経験で、人前でなにかをしても大丈夫だという気持ちになってよかった。

質疑応答の場面では、広島原子爆弾のことについて聞かれ、佐伯先生のご指名で、広島出身のわたしが答えることになった。突然のことで頭が真っ白になり、適確に答えることができなかったかもしれないが、自分が小学校、中学校、高校で学んだ広島県民ならではの話を話した。広島の生徒は8月6日に学校に来て、折り鶴を折ったり、黙とうしたりするこ



アルムスリム大学学生たちと

とを話すと、みんなしっかり聞いてくれて非常に嬉しかった。

学生たちとの交流を終え、次は理事長のお宅でホームステイをさせていただいた。ホームステイははじめての経験で、非常に緊張した。そこでも英語はほぼ通じず、コミュニケーションをとることはとても困難だった。自分たちペアもけっして英語が得意なわけではなかったが、まったく通じる人がいないわけではなかったのも、なんとか話をしようと努力した。ぎこちなかったけれども、なんとか通じたので安心した。

理事長は海老の養殖場のオーナーをしていたので、夕食では、そこで獲れた海老を食べさせていただいた。普段日本では、獲れたての海老を食べるという機会はまったくないので、興奮しながらお腹いっぱい食べることができた。

しかし、インドネシアに着いてから辛いものばかり食べていたり、多少のストレスもあったりしたせいか、理事長のお宅ではずっとお腹の調子が悪く、夜中に起きて何回もトイレに駆け込んでいた。それでも笑顔が絶えることはなかった。

寝る前には、お孫さん 2 人とパソコンの翻訳サイトで会話をし、はじめて本格的にコミュニケーションをとることができた。さまざまな質疑応答を自由自在にできたため、非常に感動した。

そして、そのような翻訳サイトばかりに頼るのではなく、勉強して自分の力だけで会話を楽しみたいと心の底から思えることができた。それもまた自分にとっては一つの進歩だと感じた。

よく世界の日本を紹介する番組などで、日本人は温かくてとても親切だという言葉が聞いていた。けれども、理事長家族の方々は、まったく言葉が通じないわたしたちをまるで家族のように迎え入れてくれ、日本人が特別ではないと気付いた。心の底からまた来たい、住みたいと思うことができる家庭であった。

海外にまだ慣れていないせいか今回は体調不良が目立った。自分は海外の環境や異文化にふれることが向いていないのかもしれないと感じ、落ち込むこともあった。しかしこのホームステイを通じて、文化は違ってもどの国も人の優しさや温かさは同じなのだと感じることもできた。

ホームステイのように、一般家庭に滞在することは、その国を知る、理解するにあたって、本当に大切なことではないかと感じた。これからさまざまな国に行くことは多々あると思うが、そのときは観光地だけを巡るのではなく、学校や家庭などその国の一般の生活を実際に体験して、深く知っていきたいと思った。

アルムスリム大学で学び、気づかされたこと

深川 開斗 (FUKAGAWA Kaito)

わたしは、8月21日、22日にアルムスリム大学を訪問した。21日は、ユネスコ無形文化遺産の緊急保護リスト入りした「サマンの踊り」をアルムスリム大学の学生に教わった。「サマンの踊り」は、動きが多くて、覚えるのがとても難しかった。しかし、踊りを覚えることよりも、自分にとって難しかったことがあった。それは、言葉の違いだ。インドネシア語がわからないわたしたちは、最初は英語が通じると思っていた。しかし、いざ会ってみると、英語は少ししか伝わらなかった。結局、学生からは、踊りを身振り手振りで教わった。言葉が通じなければ、踊りのフリを一つ教えることすらとても難しいことだと感じた。アルムスリム大学の学生が、踊りの覚えが悪くて言葉も通じないわたしにとっても優しく笑顔で教えてくれたことが印象的だった。

21日の夜はアルムスリム大学の学部長の家にホームステイをした。わたしにとって、ホームステイという体験ははじめてだった。ホームステイに前々から興味をもっていたので、とても楽しみな気持ちでいっぱいだった。しかし、いざ先生のもとから離れると、まったくわからないアチェ語で話されて、会話が理解できなくて困った。そんななかホームステイ先に、わたしと1歳しか年が違わない子どもがいて、日本のアニメの話題がきっかけで仲良くなった。日本のアニメがインドネシアの若者に人気があることを知って驚いた。ホームステイ先の子どもは、学校で日本語を学んでいて、スマートフォンの翻訳機能を通して会話することができた。ホームステイ先の人たちがとても優しく、どれだけ言葉が通じなくても、意味が通じるまでジェスチャーなどで伝えようとしてくれたことが、わたしには嬉しかった。

一晩一緒に暮らしたただけだが、インドネシアの人たちの生活が、日本とかなり違っていることに気がついた。まずひとつ目は食生活だ。日本だと夕食は1回だけだが、インドネシアは夕食を食べたあとにもう一度お客さんへのおもてなしとしてセカンドディナーという2回目の食事があった。2つ目は、お風呂だ。インドネシアでは日本と違い、湯船がなく水浴びだった。そして水浴びも朝と夜の2回おこなっていた。わたしたちは水浴びを2回おこなうことを知らなかったので、ホームステイ先では汚いぞと言われた。3つ目は、時間だ。集合時間がしっかり決められているにも関わらず、ゆっくりと準備して、集合時間に間に合わなかった。この3つのことから日本との違いを肌で感じることもできた。

22日は、アルムスリム大学で、前日に覚えたサマンと事前に日本で練習してき

た踊りとプレゼンテーションをおこなった。踊りは自分が思っていた以上に盛り上がっていて、日本の踊りがこれほど人気があることに驚いた。プレゼンテーションは練習どおりにしっかりと、日本の学生が休日どのように過ごしているか伝えることができた。最後に写真撮影があった。有名人のように写真を迫られてやっぱり外国人は珍しいのだなと思った。この2日間で、アルムスリム大学の学生たちが、考えていることや感じていることが、日本の学生となんら変わらないと感じた。わたしたちを心よく受け入れてくれたので、アルムスリム大学の学生との交流は、とても楽しく時間が過ぎていき、2日間では足りなくもっと交流をしたと思った体験だった。

ホームステイで見つけた本当の自分

～アルムスリム大学を訪れて～

水谷 奈津子 (MIZUTANI Natsuko)

学生との交流

アルムスリム大学を訪れ、学生と交流をした。学生たちにアチェの踊りである「サマンの踊り」を教えてもらい、一緒に発表や、わたしたちの日本に関するプレゼンを聞いてもらった。学生たちの質問を聞いていると、日本に興味をもってくれたことへの嬉しさを感じる反面、わたしたちには答えられない社会問題についての質問もあり、自分たちは日本人であるにも関わらず、日本のことを知らないことに少し恥ずかしさを感じた。学生との交流は英語を話せる子が少なく、簡単にはコミュニケーションがとりにくかった。わたしに踊りをペアで教えてくれた男の子は、幸運なことに英語が上手でなんとか話すことができた。彼とはいまでも連絡をとっている。新しくインドネシア人の友だちができて嬉しく思う。インドネシアの学生とは少しの時間しか共有できなかったのも、どんな感じだったかと聞かれると説明するのは難しい。だが、国際文化協力学科で学ぶ自分にとって遠く離れたインドネシアのアチェという文化が違う場で、貴重な「サマンの踊り」を教えてもらいながら交流できたことがいい経験になったと思う。

待ちに待ったホームステイ

今回のツアーでもっとも楽しみとしていたホームステイ。わたしはアルムスリム大学教育学部長のザハラさんの家でお世話になった。一緒にスタディツアーに参加したほかの仲間は2人ペアのホームステイだったが、わたしはみんなと違い、ひとりでホームステイ先に行くことができた。インドネシア語の本をもって行っ

たが、まったく会話はできないに等しかった。言葉が通じるかな？という心配やドキドキする緊張よりも、ホテルに泊まるのではなくインドネシア本来の生活と文化を体験できる楽しみのほうが大きかった。なぜなら 2014 年に参加したフィリピン・スタディツアーでは、ホームステイというイベントはなかったからだ。だからこそ今年は去年と違った文化の体験の仕方ができるのと、先輩方の報告書を見て懂れていた部分もあり、とても楽しみであった。

やはり緊張してしまった？！

ホームステイに行く前は教育学部長のザハラさんということしか聞かされておらず、家族構成などほかの情報は知らされずに、わたしはホストマザーとなったザハラさんに会った。ホストマザーの第一印象は、少し気難しそうな人だということだった。家は車で 10 分ぐらいだったがその車のなかでは沈黙。最初は緊張などはなかったけども、いざ会ってみると緊張しうまく話せなかった。家は平屋で黄色を基調とした温かみのある可愛いお家だった。とにかく広くて驚いた。家にはリスカという 16 歳の娘がいて、彼女は英語が上手だった。家ではリスカと英語で話し、ホストマザーたちにインドネシア語に訳してもらいコミュニケーションをとった。

インドネシア流のお・も・て・な・し

家に到着するとすぐにお菓子やフルーツがたくさん出され、おもてなしを受けた。夕飯前だったが、ここでだされたマンゴスチンが美味しくてたくさん食べた。わたしはお土産として買って来た扇子と手ぬぐいや抹茶のお菓子などを渡した。ホストファミリーからは、アチェのお菓子、民芸品の鞆とポーチ、ヒジャブ（イスラーム教徒の女性がかぶるベール）そのヒジャブ用の綺麗なアクセサリーをもらった。わたしが渡したお土産にまさるほど素晴らしく、本当に嬉しいプレゼントをもらい本当に本当に嬉しかった。さらに帰るときにはわたしがマンゴスチンを美味しいとほうばってるのをみたホストマザーが、大量のマンゴスチンとランブータンというフルーツをたくさんわたしにくれた。たった 1 泊 2 日のホームステイで、まったくインドネシア語も話せないわたしに、ホストファミリーが優しくしてくれたことが嬉しかった。

あれ、パーティーは??

最初にホストマザーに直面したときに、「今日は近くの家でパーティーをしているから行くよ」と聞かされていた。いろいろな人と交流できるワクワク感とご馳走が食



浜辺での交流

べられるという期待感があった。マンゴスチンを食べながらリスカと話していたら、夜ご飯だよと呼ばれ、リビングに行くと言われ、メイドさんの手づくりのインドネシア料理が並んでいた。夜ご飯はパーティーで食べると思っていたが、豪華な手料理で味も美味しくて、少し前までマンゴスチン食べていたのにたくさん夜ご飯を食べた。まだまだ手でご飯を食べることに慣れておらず、大変だった。そしてそのときふと気づいた。インドネシアに来てずっと言葉は佐伯先生に頼ってばかりいたのだ。そして周りには一緒に来た仲間がいつも必ず隣にいてその場で感じたことなどを話してシェアして楽しんでいた。しかし、この日はなにもかも自分だけとなり、その場では唯一の外国人である。自分はいま日本から遠く離れた場所にひとりなんだと不思議な気持ちを抱いた。そして、こうして日本から遠く離れた場所でホストファミリーと食卓でご飯を食べていることが新鮮だった。勉強をしにインドネシアを訪れたけれども、勉強がこんなに楽しく、貴重な経験になるのかと感じた。

人生で一番食べた日

夕飯をたくさんいただいて、くつろいでいたらホストマザーにさっきあげたヒジャブをもってくるようにと言われた。そしてヒジャブをかぶってひととおり「写真大会」が終わると、これからパーティーに行くと言われた。21時を過ぎていたのでびっくりしたが、歩いて5分ほどの場所だった。パーティーというより、なにかの集まりのような場所に連れていかれた。日本人学生の子を連れて来たとホストマザーが紹介すると、ちょっとした騒ぎになり、全員が挨拶しに来てくれたり、質問攻めにあたりした。とても驚いたものの、見知らぬわたしを暖かく受け入れてくれた。そこでもち米に甘いソースがかかったデザートを食べ、アチェの文化を目の前で体験することができた。帰り道にホストマザーが「アチェ麺は食べたことある？」と聞かれたため、わたしが「ないです」と答えると、帰り道にあったお店でテイクアウトをしてくれた。正直にいうと本当にお腹いっぱい、はち切れそうだった。断りきれなかった自分が悪いかもしれないが、優しさをたくさんもらったのでしっかり食べた。こんなにも人生でたくさん食べたのははじめてだったが、それがアチェでしか食べれないものばかりだったのでいい思い出だ。

Terima kasih!!! ありがとう

たくさん食べたものと文化の違いの思い出と、リスカと話した会話やホストマザーの優しさ。リスカは16歳の高校生だが、夢は「兄と同じように医者になることだ」と言っていた。自分より歳下の子が夢を堂々と語り、それに向けてどう勉強しているのかを話してくれた。いっぽうで夢を聞かれてすぐに答えられなかった自分。「海外で困ってる人たちのためになることがしたい」と伝えたが、具体的には答えることはできなかった。しかしこの経験は、なぜいま自分がアチェにいて、勉強しているのかを改めて強く考えさせてくれた。

高校2年生のときにニュージーランドで2カ月ホームステイを経験したけれども、今回のホームステイはそのときとはまったく異なる感情を抱き、こんなにも貴重なホームステイがあるのか?!と改めて参加したことに誇りに感じた。直接に文化やその国の人とふれ合うこと。基本的で当たり前のことかもしれない。しかし、それがわたしにとって楽しいということ。日本との違いを感じ、それが不便だから嫌だと思わず、違うからこそそれがおもしろくて興味がある。だからいまこの学科を進学先に選択したと、胸を張って言える答えが見つかった。いままではただ海外に興味があり、人助けをしたいとどこかでありがちな理由で大学に入学してきたが、いまの自分のなかにはもう、そんな自分はいない。

ホームステイはたった1泊2日だったが、こんなにも濃密で貴重な経験ができるなんて、最初の期待以上の結果となってとても満足している。そして、ホームステイでお世話になりたくさんのことを学ばせてもらった、大好きなザハラさん一家には感謝しきれない。簡単にまた来るねと言える距離と場所ではないけれど、このホームステイがあったからこそもっとアチェが好きになった。この一期一会で終わらないよう、自分で機会をつくり、もう一度訪れたいと心から思った。

アチェの人びとの優しさにふれて

～ホームステイ、アルムスリム大学について～

安井 都々美 (YASUI Tsuzumi)

ホームステイ 家族

ホームステイ先では気さくなお母さん、優しいお父さん、おばあちゃんそして、娘3人と息子1人、そして猫2匹の家族と1日を一緒に暮らさせていただいた。

ホームステイ先の家に着くと、いままで見てきた家とは違って、それは石でできた立派な家であった。家についてすぐ、お母さんからシャワーを浴びたいか、海に行きたいかと聞かれた。海に行きたくても着替えの服をもっていなかったために行けないと伝えたかったが、インドネシア語が話せずに伝えることができなかった。着替えがないというたった一言なのに、伝えられないもどかしさかられた。

その後、水着の件はなんとか伝わった。日本では海では水着を着るのに対して、アチェの女性はムスリム（イスラーム教徒）であるために、パジャマを着て海に入るという話を聞いた。パジャマを着て海に入るのは、新鮮であり、アチェの習慣を感じられた。家に戻ると、お母さんがインドネシアの料理と、たくさんのフ

ルーツを出してくださった。お腹いっぱい食べて、夜はみんなでテレビを観て、お母さんと娘 3 人でたくさんの写真を撮り、お父さんとも翻訳アプリをつかいないがたくさんお話しして、たくさん笑って楽しい夜を過ごすことができた。寝る前におでこにキスをされたことは恥ずかしかったが、ホームステイ先の家族との距離が縮まった気がしてなによりも嬉しかった。はじめから最後まで本当の娘のように接してくれて感謝でいっぱいだ。

アルムスリム大学 友だち

アルムスリム大学では、年齢が近いインドネシアの学生がどんなことをしているのか、何を学んでいるのか、インドネシアの学生のあいだでは、いま何が流行っていてどんな学生たちがいるのだろうと気になることばかりであった。大学へ入ると学生のほとんどが女子生徒で、みんな笑顔で迎え入れてくれた。

アルムスリム大学の学生のみんなから、アチェの伝統舞踊「サマン」を教えてもらった。手の動きが細かく、覚えるのに必死だった。なかでも、一番辛かったのが長時間正座をしていたため、足の痺れと痛みで練習がはかどらないことだった。それでも、学生たちは、わたしたちに何度も何度も「サマンの踊り」を教えてくれた。間違えたところをやり直していくうちにリズムも覚え、体も慣れてきて、しだいにわたしたちは、踊れるようになっていったのである。同時にアルムスリム大学の学生との仲も深まっていき、練習のあいだでさえ楽しい時間であった。

本番当日、一番はじめにわたしたち日本人学生が日本のことについて発表した。わたしたちの班は、先進国の日本では、楽しげな日常生活の裏にいじめや過労死、自殺問題など多くの問題があることを発表した。その後の質問の時間では、いろいろな質問が出された。その質問を通じて、日本人が日本でアルバイトをし、お金を稼いでインドネシアへ行くことは可能でも、物価が安いインドネシアの学生がどれだけ働いても、この物価が違うために、日本へ来ることができないことがわかった。もしも、名古屋学院大学とアルムスリム大学とのあいだで、交換留学が可能になれば、彼らも日本へ来ることができると思う。今回わたしたちがインドネシアへ行き、インドネシアの方たちの優しさや、おもてなし、インドネシアの街や、歴史を肌で感じられたように、アルムスリム大学生が日本に来て、日本の良さや日本らしさを感じてもらい、普段日本の友だちと日常的におこなうようなことをインドネシアの学生ともできたら嬉しいなと思った。また、わたしも交換留学を通して、もう一度インドネシアにいけるなら、行きたいと思った。

最後に、大学生と一緒に練習してくれたインドネシアの伝統舞踊「サマン」をアルムスリム大学の学生と一緒に踊った。緊張のあまり踊っている最中のことはあまり覚えていない。終わったときには、無事に踊りきった安心感と終わってしまった寂しさかられたが、それ以上にみんなで一つのことをやり終えたという

感動を覚えた。このときの感動は一生忘れないだろう。

人のあたたかさ ～アチェで感じたもの～

山本 泰裕 (YAMAMOTO Yasuhiro)

最初の印象

アルムスリム大学へ行ったときに感じたのは、とても視線を感じるということだ。わたしは日本人であり、彼らにとっては、わたしが珍しいのである。打ち解けていくと外国人ならではの日本のマニアックな質問など、日本の一昔前の情報などが聞けておもしろかった。そしてほとんどの方が日本に対して良いイメージをもって来ていた。そしてわたしは、このように日本に興味をもってきているアルムスリム大学の学生と交流をした。

アルムスリム大学の学生との交流

まず、アチェの伝統のダンスである「サマンの踊り」を学生から習った。アルムスリムの学生は、英語が話せる学生が多く、コミュニケーションをとりながら、楽しくダンスを習うことができた。そしてアルムスリム大学の学生は、みんな気さくだった。話しかけてくれる人が多く、すぐにみんなと仲良くすることができた。翌日のアルムスリム大学の交流会で、前日に覚えたサマンをアルムスリムの学生と一緒に披露した。

わたしたちは、さらに日本での学生生活、日本の社会問題、日本文化についてプレゼンテーションをした。アルムスリム大学の学生たちは、サマンのダンスと、日本の歌の「涙そうそう」を披露してくれた。日本でも通用するぐらい上手で、とても感動した。どの生徒もわたしたちのプレゼンテーションを真面目に聞いてくれ、日本に興味をもってくれた。多くの学生がわたしたちに、日本についての質問をしたが、それ以上に答えられなかったこともあった。そこでわたしは、日本のことを外国の人たちに説明できるよう、もっと日本に知識をもつべきだと感じた。



「フォーチュンクッキー」を披露する

はじめてのホームステイ

アルムスリム大学での訪問のあいだ、1泊だけホームステイをする機会があった。アルムスリム大学の学長の家に宿泊をさせていただいた。最初は、インドネシア語も通じなく不安ばかりだったわたしたちを、快く、そして暖かく迎えてくれた学長の家族のことを、いまでも忘れられない。

家に着いたとき、学長家族は多くのインドネシアのフルーツを出してくれた。どれも美味しく、わたしたちがつまらない思いをしないようにと、多くのおもてなしをしてくれた。そしてわたしたちのホストマザーはわたしたちに果物の王様であるドリアンを食べさせてくれた。しかし、ドリアンを一度も食べたことのないわたしには、においが強いドリアンの味をホストマザーに表現するのが大変であった。その家で、わたしはホストブラザーの存在を知った。彼は医者で英語も話すことができ、彼とはじっくりコミュニケーションをとることができた。そのとき、自分で準備した緑茶、日本地図が書いてあるシャツなどのお土産をプレゼントした。彼は日本のシャツに興味をもち、多くの日本の質問をし、日本にとっても興味をもってくれた。彼は桜を見たことがないらしく、いつかは見たいと言っていた。その夜は、家族全員で外食に行き、インドネシアの料理であるナシ・ゴレン（炒飯）をご馳走してくれた。そこでは、みんながインドネシア語がわからないわたしたちにも伝わるように、ジェスチャーを入れて会話をしてくれた。

夕食のあと、学長の付き添いで来ていたアルムスリム大学の男子生徒と長いあいだ、日本や、インドネシアとの違いや、お互いの文化などの話をした。彼は日本での留学を考えているが、日本の学費はとても払えるものではないために、留学は難しいと言っていたのが印象的であった。日本はとても裕福であり、望めばほとんどの人が留学に行ったり、大学に進学したりすることができる。だが、世界には、自分のやりたいことも、経済的な理由であきらめざるを得ない人もいるのだ。その男子学生は卒業したら、自分の国のために役立つ仕事がしたいと言っていた。彼のように純粋な気持ちをもった人はインドネシアという国の発展には必要不可欠な人間であると思った。

次の日の朝、プレゼントのお返しに学長家族から、インドネシアの伝統服である腰巻をいただいた。それはいまでも宝物である。

このホームステイで学んだことは、たとえ言葉が通じなくても気持ちは伝わるし、なにごとにも自分なりに挑戦することと、世界には自分のやりたいことがさまざまな理由によってできない人もいるということである。言葉が通じないホームステイは、一番不安だったが、このようにとても優しく、暖かい方がたの家にホームステイができて安心した。本当に感謝の気持ちでいっぱいである。そしていつかまた、学長の家に行き、恩返しをしたいと思う。本当に人生ではじめてのホームステイは、本当にいい経験になった。

隔離された集落での被害

神納 和希 (JINNO Kazuki)

マタン・スリメンでの津波の被害

2004年12月26日、日曜の朝7時58分、インド洋で震度9.1の地震が起き、地震の10分後に津波が発生した。震源地にもっとも近かったアチェでは、約20万人以上が死亡、4万人近くが行方不明となった。

わたしたちは、津波で壊滅的な被害を受けた北アチェ県サムドゥラ郡マタン・スリメン集落を訪問した。マタン・スリメン集落の被害は、たまたま村を訪れていた男性1人と女性15人、子ども11人が犠牲になった。そして家は1軒も残らず全壊した。

マタン・スリメン集落は、ハンセン病患者や回復者が、差別から逃れるために、海沿いにつくった集落だ。

ハンセン病とは、体の末梢神経が麻痺したり、皮膚がただれたりする病気である。感染しやすい、遺伝するなど、病気に関する誤った認識から、差別や嫌がらせの対象になってきた。

津波に襲われたとき、集落の女性たちは子どもや、漁に出ている夫を探しながら逃げたそうだ。ヤシの木にのぼり助かった人もいれば、流された人もいた。ほかの村の人びとと1カ月ほど避難したが、ハンセン病に対する偏見から、支援物資の食べものをもらえなかったり、台所に入るなど言われたりしたため、さらに別の場所に避難した。ここにある観光局の建物は掘っ立て小屋のようなものだったが、政府の建物なので少しは安心して暮らせたということだった。

その後、ほかに受け入れてくれるところもなかったのもので、集落の人びとは、再び津波が起きたら被害を受けることになるであろう海沿いの元の集落に戻るしかなかった。NGOが家をつくる支援をしたが、井戸は塩水しか出ないもので、川の水をパイプで井戸まで送り、飲んだり水浴びしたりした。

津波のトラウマで強風のときでも逃げようとするほどだったが1年ぐらいては津波のトラウマが消え、いままでの生活に戻ったそうだ。

ゴザ編み

この集落では、津波の話を知っただけでなく、ゴザ編みも習った。集落の女性たちの一部は、ゴザを編んで、生計を立てている。

ゴザ編みでつかうのは、パンダンという木の葉っぱだ。

最初に、葉柄（ようへい）という真ん中のかたい筋をとり、乾かす。乾かしたあと、刃が4枚ある道具をつかって、葉っぱに裂け目を入れる。そのあとヘラを



2色の葉を組み合わせて模様ができる

日間ぐらいで完成するゴザは、1枚 800 円ぐらいで売れるそうだ。

ゴザを編むのはとても難しく集中力がある作業だった。自分なりに模様も考えて編んでいたのだが、まったく違う模様になってしまい、さらにゴザ編みの難しさを知った。なかにはもっと複雑な模様もあった。編み方を知ってみると、とても自分にはできないなと思った。

女性グループ

ゴザ編みをしている女性たちは、わたしたちに同行してくれた現地の NGO のスタッフに、グループを立ち上げる支援をしてほしいと頼んでいた。ゴザを売ったお金の 5% をグループの資金として積み立て、その資金をグループの女性たちの自立のために役立てていくということだった。

今回、わたしたちが訪問するにあたって、ゴザ編みの材料費や女性たちへの講師料として、1 万円を準備していた。グループを立ち上げる話が、集落の女性たちから出てきたので、グループのメンバーや代表、グループのお金を管理する人を話し合ってもらってから、この 1 万円を渡すことになった。

* * *

津波を乗り越えみえたもの

～津波の被害とその後～

神納 和希 (JINNO Kazuki)

わたしたちは津波の被害に遭った人たちのいるマタン・スリメン集落を訪れた。わたしはこのように苦しい思いをしている人の話を、テレビの画面越しではなく

直接聞くことができることが、スタディツアーの重要な目的だと思う。日本でテレビを観て、他人事のように思うのではなく、実際に自分の目で見て、耳でその人たちの話を聞くことで、本当に辛かったということが、話してくれた方たちの表情や声のトーンから痛いほどに伝わってきた。

津波の被害に遭った人たちの話では、地震の約10分後に津波がやって来たという。なかには漁に出ていた夫を探す女性や、子どもたちを探す女性、子どもたちと逃げる女性、ヤシの木にのぼり助かった者もいれば、流されてしまった者もいるようだ。

助かった人たちで避難したが、この村の人びとがハンセン病患者・回復者だったことが、その後も困難に直面していった理由のひとつになった。ハンセン病は体の末梢神経が麻痺したり、皮膚がただれたりする病気であり、感染しやすい、遺伝するなど、病気に関する誤った認識から、差別や嫌がらせの対象になってきた。そのため海沿いに避難してきたものの、食糧を分けてもらえなかったり、からかわれたりするなどの被害に遭ってきた。避難生活を終えても、受け入れてくれるところがなかったため、海沿いの元の土地に戻り、竹などで家をつくったようだ。津波のトラウマから、強風のときはすぐに逃げられるようにしたという。NGOから家を支援されたが、井戸から塩水しか出なかったため、川からパイプを繋いで水を確保したという。津波のトラウマから、強風のときはすぐに逃げられるようにした。

1年ほど経ち、津波のトラウマも消えて、いままでの生活に戻った。現在、女性たちはゴザを編んで生計を立てている。わたしたちはそのゴザ編みも体験させてもらった。ゴザ編みでつかうのは、パンダンという木の葉だ。そのパンダンの葉にさまざまな加工を施してゴザを編んでいく。複雑な模様になればなるほど、編むのに時間がかかる。丸々5日かけて完成するゴザで、1枚800円ぐらいで売れるようだ。実際に体験して、ゴザを編むことの難しさを知った。ゴザを編むのはとても集中力のいる作業だった。自分なりに模様を考えていたのだが、でき上がったゴザは自分の思っている模様とはまったく違った。さらに大きく複雑な模様を編むことができる村の女性たちはすごいと思った。

そして女性たちは、ゴザづくりの女性グループを立ち上げようとしていた。グループでは自分たちで売ったゴザ全体の5%をグループの資金として積み立てていくというものである。別の仕事をしている女性たちもグループをつくりたがっ



村の女性からゴザ編みを習う

ているそうだった。それぞれのグループが、お互い助け合うことを目指しているそう。わたしたちは、ゴザ編み体験の講師料、材料費として 1 万円を用意していた。その 1 万円はグループの責任者、お金の管理者などが決まってから渡すことになった。

この話を聞いて、女性たちがとてもたくましく、生きていく力をもっていることがすばらしいと思った。いやがらせを受けて元の土地に戻り、自分たちで川から水を引いて、飲料水を確保するというのも、日本で生活している自分にはできないことだ。このような現実を目の当たりにすると、やはり日本は恵まれているということがとても納得できた。

日本にいるときは毎日が平和で、生きていくのに不自由することもなければ、迫害に遭うこともない。この生活が当たり前だと思っていたし、これ以外の生活も考えられなかった。もちろん発展途上国でたいへんな生活をしてきた人たちがいることは知っていたが、今回のスタディツアーに参加しなければ、世界で起きている問題にあまり関心をもたなかったと思う。自分にとって当たり前のことでも、世界では当たり前ではないことが多いのだと思い知った。もっとたくさんの世界で起きている問題を知り、それを他人事だと思わないことにしたい。

村の声から考える支援

～実際の声から考える本当の支援～

杉本 萌 (SUGIMOTO Moe)

津波の被害を受けた村

8 月 25 日は、実際に津波の被害を受けた村を訪問した。北アチェ県のマタン・スリメン集落だ。マタン・スリメン集落は、ハンセン病患者が差別から逃れるためにつくった集落だ。ハンセン病は、感染しやすく、遺伝するなどの間違った情報から差別を受ける対象となっていた。そういった差別から、支援物質を与えてもらえなかったり、「関わるな」などと言われたり、集落に受け入れてもらえなかったりと、津波被害者である集落の人びとも差別を受けていた。集落に着き、最初に感じたことは、津波の被害のつめ跡がまったくないということだ。

わたしたちは、集落で実際に津波の被害を受けた人びとの話を聞いた。集落の人びとは、「日曜の朝 8 時ごろに地震があった。その 10 分後に水がきた。女の人たちは、夫や子どもを探しているときに津波に巻き込まれた」「ヤシの木にのぼり助かった人もいる」と当時のことを詳しく話してくれた。つらい記憶であり、あ

まり思い出したくない経験を細かく話してくれた集落の人びとに感謝したい。

わたしたちの印象に残ったのは、「被害がおさまったあとでも、津波のトラウマが残り、強風が吹くたびに恐怖を感じ、逃げる準備をしていた」といった話だ。トラウマがずっと残るほどの怖さであることが伝わってきた。そして逆に、日本の豊かさも実感することができた。日本は情報技術が発展して



マタン・スリメン集落の女性たちと

いるため、津波がくるときは警報が鳴り避難することができる。また、この津波でどのくらい被害が出るなど情報を共有することができる。情報技術が日本ほど発展していない集落で、これを共有することは難しい。津波の知識があまりなく、情報が少ないことが日本との違いであると感じた。

生活を支えるゴザづくり

集落の人びとは、ゴザをつくり生活を支えている。わたしたちは、集落の女性たちから、ゴザづくりを習った。見た目は簡単そうに見えたが、実際に体験すると編み方が複雑でとても難しかった。わたしに教えてくれた女性は、足をつかいながら、難しい模様を編んでいた。

ゴザの材料は、パンダンという植物の葉だ。はじめに固い部分を乾かす。次に裂け目をいれ、柔らかくする。沸騰したお湯にいれると緑色になる。水につけて2晩干す。色を付けたい場合には着色料をつける。この材料が完成したら、4本を交互に巻き付ける。わたしたちはこの巻き付ける作業から体験した。集落の女性たちは複雑な編み方にも関わらず、すらすらと編んでいる様子だった。とても集中力のいる作業であり、編み方がなかなか覚えられず、大変だった。このゴザは、形や模様によって違うが、だいたい1週間で完成するそうだ。ゴザは、だいたい8万ルピアで売れる。8万ルピアは、日本で約800円だ。1週間も時間がかかりとても大変な作業であるのにも関わらず、安すぎる値段だ。とても実用性があるゴザなので高値で取引されるべきであると感じた。

村の声から考えること

わたしたちは、集落の人子どもたちに日本の法被と子どもたちにお菓子を渡した。子どもたちは、最初はなかなか警戒心をといてくれなかったが徐々に仲良くなれた。日本のせんべいのお菓子がとても人気があった。梅の味やワサビ味など日本独自の味であり、好きになってくれるか不安であったが、嬉しそうに食べている様子であった。子どもたちは、照れながらもわたしたちを歓迎してくれ、嬉しく思った。

集落の人びとは、「生活はもとに戻ったが、豊かでないぎりぎりの生活に支援して欲しい」「ゴザを熱心にやっているから支援をしてほしい」と話した。集落の人びとは貧しい生活のなかで、自分たちは何ができるか考えて協力しながら生活を送っている。共同生活のなかで知恵を出して協力しながら生活する姿は、わたしたちも見習うべきである。集落の女性は「将来、国際関係の仕事に就きたいと考えている人は、村などの現状にしっかりと目を向けて、支援をおこなうべきだ」と話した。わたしはいままで、被害を受けた現場をみることや、実際に被害を受けた人びとの話を聞くことがなかった。お金や物資を与えることが支援であると考えていた。この村の訪問を通して、本当の支援のためには、まず現場へ行き実際の声を聞くことが大切だと感じた。実際の声を聞くことによって被害を受けた人びとが本当に必要なものがみえてくる。聞いた声をみんなに伝えることも大切であるとする。訪問を終え、話を聞いたわたしたちができることは、聞いたことを伝えていくことだ。

開発で苦しむ村とアチェ

～本当の国際協力とは？～

水谷 奈津子 (MIZUTANI Natsuko)

はじめに

日本は1954年以降、政府開発援助（ODA）の枠組みで発展途上国に資金的・技術的な協力をおこなってきた。インドネシアのアチェでは、1974年には天然ガス開発借款、1978年にはアセアン工業プロジェクト支援を供与している。この借款によって建てられたのが、天然ガスを液化するアルン LNG 社と肥料をつくるアセアン・アチェ肥料社だ。しかし、この開発により、アチェに住む人たちは村を奪われたり、生活がもっと苦しくなったりした。貧しい人たちのために手助けするはずの ODA によって、アルン LNG 社とアセアン肥料社が建設されたことで、アチェに対して不平等なことが起き、独立運動まで発展、そして紛争へと繋がってしまった。

なぜそうなってしまったのか。わたしたちが訪れ、話を伺ってきた4つの村の被害状況と現在について報告したい。

なぜ ODA はアチェに供与された？

アチェでの開発は、住民のニーズにもとづいて実施されたわけではなく、日本の利益確保が目的のひとつとなっていた。日本は先進国であり、エネルギーなどを大量につかう。しかし、エネルギー資源国ではないために、日本は他国からの輸入に依存しなくてはならない。

1973年に日本では石油ショックが起き、中東からの原油依存から抜け出す必要性が認識されるようになった。そのような状況で、1971年にアメリカがアチェで天然ガスを発掘した天然ガスに、日本は注目したのである。天然ガスはクリーンなエネルギーといわれ、公害が深刻化していた日本にとって、天然ガスはとても魅力的だった。そして、日本はアルン社建設のために ODA を供与し、その代わりに液化天然ガス（LNG）をほぼ独占的に輸入したのだ。この ODA 開発がアチェの人びとを苦しめ、独立運動までになるとは日本は思っていなかっただろう。しかし、紛争の原因をたどれば、この開発援助が大きく関わっている。

テント暮らしをする彼ら 約束を守られなかった村

わたしたちはアルン社の前でテント暮らしをしている人びとに話を聞いた。彼らは1974年、アルン社建設のため土地を収用されたという。故郷である4つの村は消滅した。土地の収用にあたっては、誰もが納得して収用に応じたわけではなく、



アルン LNG 社周辺に立ち並ぶテント

土地が収用されることに反対し、逮捕された人もいた。土地収用は、自発的なものというより、強制によるものだったのだ。

彼らは土地収用に受け入れるにあたり、会社とインドネシア政府から事前にある約束をとりつけていた。住む家、農作業用の土地が保証されること。子どもたちの学校とイスラーム教徒である彼らにとって大切なモスクを建設することである。アルン社側からも逆に

条件を提示されたそう。もし、移動に応じてくれるなら、村人をアルン社で雇う、子どもたちを日本やアメリカに留学させる手伝いをするなどという条件だ。

しかし、実際は約束どおりではなかった。4カ村の人たちに移転地は準備されなかった。アルン社から約束された雇用も守られず、アルン社で働くインドネシア人はジャカルタなど都市からの人びとばかりだった。しかし、アチェでは1964年から独立運動が闘われており、住民たちは訴えることができなかった。もし訴えれば、自分も国軍に捕まるかもしれないという恐怖があったという。

しかし、2005年に和平合意が締結されて紛争が終わり、行き場所を失って、離散していた4カ村の人びとははじめて土地収用のときに結んだ約束を守って欲しいと訴えはじめた。訴えは2009年からはじまり、故郷を取り返すため、彼らは住民団体IKBALを結成した。そして、アルン社の近くに大きなテントを張り、約束の遵守を求めて、アルン社前に居座り訴え続けたそう。しかし、状況はまったく改善されなかったため、自分たちの村があった場所で暮らしはじめようとなり、現在はアルン社周辺の道沿いに世帯ごとに1つ1つテントを張って暮らしている。

ウジョン・ブラン村 漁が厳しくなった漁村

アルン社のすぐ横にウジョン・ブラン村という漁村がある。アルン社建設の際、土地収用されたのは一部だけで、村は消滅しなかった。しかし、この村は、アルン社が横に建設されたために、生活が苦しくなったという。なぜなら、漁船をとめていた河口付近がアルン社の港になったからだ。村の人たちが漁に出られるよう、河から海まで人工の水路が掘られたが、人工で簡単に造られたためかすぐに砂が溜まってしまい、満潮のときしか、船を出したり、水揚げしたりすることができていない。水深は、実際に底が目で見えるぐらい浅く、船の底は下の砂に埋まっていた。

アルン社による協力で防潮堤もつくられたが、波が高いと漁船が防潮堤にぶつかり壊れてしまうそう。漁船の修理代は漁民の負担となる。村人は、アルン社

ができたことにより漁業が上手いかなくなったと村人は言っていた。アルン社は収益を上げているにも関わらず、漁村は貧しくなる一方である。

ウジョン・ブラン村でも、テント暮らしをしている人から聞いたことと同じく、アルン社で働きたくても、アルン社で働く人たちはみなジャカルタから来た人ばかりという話を聞いた。特別な技術がなくても、アルン社で働くことができる人は村にたくさんいるのにと言っていた。

村が苦しんでいるのに、政治家は何も支援、助けをしないのかと村人に尋ねた。村人たちは、支援があっても、それは選挙の前に票を獲得するためだけのもので、当選後には漁民は放置される。政治家は汚職に染まっていると答えていた。

さらにウジョン・ブラン村では、アルン社側から水、電気を無料で提供するという約束があったが守られていないそうだ。

山奥に移された村人 鍵だけ渡された彼らは

アセアン・アチェ肥料社の建設により、5つの村 500世帯が土地収用にあった。土地収用で移転させられた人びとが、チョッ・マンボン再定住集落に暮らしていた。こちらでも彼らは移転する際に、家と水田・畑を用意すると会社から約束されていたが、その約束は守られなかった。約束された水田・畑をもらえたのは、結局たったの8人。その土地は荒れはて、みずから切り拓かねばならない人もいれば、土地の権利書はもらったが、実際その土地がどこなのかわからない人もいた。さらに、家がどれなのか教えられず、渡された鍵だけを頼りに自分たちで鍵穴にあう家を探したそうだ。

チョッ・マンボンの「チョッ」はアチェ語で「丘」を示す言葉であり、集落も名前のおり丘の上の森林地帯にある。元々海沿いに住んでいた彼らにとって、山にいきなり移されても適応できず、また農地もなかったので、生活は苦しかった。現在では15世帯ほどしか住んでいないそうだ。ヘンドンさんという65歳の女性によると、仕事がないので自分で探すという。いまは他人の畑にとうがらしを植える仕事をしているが、毎日毎日仕事があるわけではない。チョ・マンボンに住んでいる人は、移転当時のひもじさを、「石と木を食べた」と表現していた。

わたしたちは残っていた15世帯の人たちに家を見せてもらったが、本当に住める状況ではなく、ボロボロだった。家には国際移住機関(IOM)がつくった井戸もあったが、黒くにごった水しか出ない状況であり、山



再定住集落で移転の話を聞く

奥で暮らす彼らにとってこの水問題が一番深刻なのだという。

村には学校、モスクなどが建設されたが、学校は雨漏りする集会所のようなどころで、広いスペースが広がっているだけだった。

* * *

わたしたちの生活の裏 ～故郷を奪われた人びと～

後藤 大志 (GOTO Taishi)

12 日間のインドネシア・スタディツアーでは、たくさんの人びとの話を、聞き考えさせられる場面がたくさんあった。なかでも、開発の影響を受けた村々を訪問したことは、日本が関わっていたこともあり、わたしたちの暮らしを見つめなおす機会となった。

まず行った場所は、アルン LNG 建設によって影響を受けた村だ。アルン社とはガスを液化する会社で、輸出しやすいように海のそばに建設された。このガスは主に日本に輸出されている。

アルン社建設によって、その地域にあった 4 カ村の住民たちは立ち退きを要求された。アルン社は、新しい移住地や学校を準備する、子どもたちをアメリカや日本に留学をさせると約束をした。しかし、その約束は一つも守られることがなかった。4 カ村に住んでいた 530 世帯は家を奪われ、あちらこちらに散ることになった。天然ガス開発は、アチェにとっていいことかもしれない。しかし、その場



ウジョン・ブラン村に隣接するアルン LNG 社

所に住んでいる人びとが苦しい思いをすることを考えもせず、一部の人びとの利益のために行動していることにとっても腹が立った。

4 カ村の住民は、アチェが平和になってはじめて、土地収用の問題を訴えられるようになったという。しかし、アチェは平和になったが、住民たちは平和になっていないという。この言葉は、とても胸に響いた。

次に訪れたウジョン・ブラン村では、漁船をとめる河口が、アルン社の港になった。住民は、漁に出るための水路を手で掘った。この水路は、水深が浅いため、早朝でなければ潮が満ちず漁に出られない。漁に出ても満潮でなければ戻ってこられない。無理に戻ってこようとすると、船が岩などに当たり壊れてしまい、自分で修理代を出さなくてはいけない。水路への入り口も狭いため、波が高いと岩にぶつかり壊れてしまう。船が壊れると、修理代だけで50万円もかかってしまうという。

アルン社は、無料の水、電気を供与すると約束したが、それも守られなかった。村の人びとは、アルン社のせいで余計に苦しくなったそう。約束を守ってもらえず、修理代も自分たちで出し、ぎりぎりの生活を強いられていることを、アルン社は重要なことだと考えなければいけないと思った。もし、自分がそのような理不尽なことをされたのなら、この村人たちと同じようにアルン社を恨んでいたかもしれない。

つづいて、アセアン・アチェ肥料社建設によって、チョツ・マンボンへ移転してきた人たちから話を聞いた。もとは北アチェ県の5つの村に住んでいたが、この村の人びとも、土地が収用された。補償金が支払われ、家と水田・畑をもらえるという約束だった。

約500世帯は3段階に分かれて移転した。最初に移転した第1段階、次に移転した第2段階の人びとは、まだ家を用意されたが、第3段階の人びとにはなにもなかった。家が用意された第1、2段階の人びとも鍵が渡されるだけで、どこの家かわからなかったという。

チョツ・マンボンでは女性たちから話を聞いた。女性たちは80年に移転し、故郷にはもう住む場所がない。この女性たちは、約束された畑をもらえなかった。1ヘクタールの畑をもらえたのは1人だった。この畑も約束通りにもらえたわけではなく、森林を切り拓き権利書を得たものだ。多くは農地がないが、木や石を切るという重労働をこなし生計を立てている。

しかし、紛争中はこのような問題を訴えることはできなかった。政府を批判する者と考えられ、何をされるかわからないという恐怖をもちながらも、人びとがこれから生きていくために前に進んでいたことを学んだ。

アルン社もアセアン・アチェ肥料社も、日本の政府開発援助（ODA）で建設された。わたしたちは、土地収用などで苦しんでいる人がいることを知らずに、ガスをつかっている。わたしたちが当たり前のようにつかっているものでも、そのもののせいで困っている人がいるのであれば、そのことをこれからしっかりと考えるべきだろう。現在もこの問題は解決されていないので、さまざまな人に知ってもらう必要があると考えた。

アルン社のように日本が関わっている問題は、ほかにもまだまだあると思う。

日本でこのような問題について広めていき、インドネシアの現在の姿を見てほしい。

インドネシアでは、もともと賃金が低いにも関わらず、仕事を奪われ、大変な思いをして生きている人たちがいる。一方で、わたしたちは何不自由ない生活を送れている。わたしたちは恵まれているということ、このスタディツアーで実感した。

インドネシアへ行き変わったわたしの価値観

～見たことのない真実～

深川 開斗 (FUKAGAWA Kaito)

日本しか知らなかったわたしは、はじめて見たことない土地を訪問した。インドネシアのアチェだ。そこでは、テレビや新聞のなかにいるような感覚を覚える。道路は車線がところどころにしかなく、引いてあったとしても、車は無視して走っていた。道のいたるところに売店があった。山道では、野生の猿や牛などのさまざまな動物がいて、日本と違うことがとてもよく分かった。反対に、日本とアチェの関係についても知った。

アチェは、開発を通じて、日本とつながっていた。わたしは、チョッ・マンボン再定住集落を訪れ、住民たちから話を聞いた。住民たちは、日本の政府開発援助 (ODA) が供与されたアセアン・アチェ肥料社の建設にともない、立ち退きと同時に住む場所をなくしてしまった人たちだ。立ち退きの際、政府から住む家と1ヘクタールの田、1ヘクタールの畑をもらえるという約束があった。しかしその約束は守られなかった。1ヘクタールの畑をもらえた人は1人いたが、自分の力で森林を切り拓いたものだった。わたしは、政府は、こんなにも簡単に約束を破っていいのかと不思議に思った。

ほかの人たちには、1ヘクタールの畑もなかったもので、石を切る仕事をするなど、苦勞していたことを話してくれた。1日も休むことなく働いても十分なお金を得ることができず、暮らしていくことが困難だったという。この話をしているとき、女性の人たちは、目に涙を浮かべていて、どれだけ辛い生活だったのが伺えた。このような暮らしをしている人たちがいることをもっと知ってほしいと思った。

わたしは、やはり日本の ODA で建設されたアルン LNG 社に隣接するウジョン・ブラン村も訪れた。日本には、エネルギー資源がないといままで学んではいたが、

わたしたちがつかうエネルギー資源がどこから輸入されていたかは知らなかった。アチェは、天然ガスが有名で、その天然ガスを輸入したい日本は、アルン LNG 社を支援したのである。

ウジョン・ブラン村では、日本の国益のためだけに建設されたアルン社のために、つまり日本の責任で困難な状態のおかれている人びとに会った。ウジョン・ブラン村の人びとは、多くの



水深が浅くなり、漁が困難に

の人が漁で生計を立てていた。アルン LNG 社が建設され、漁船がとめられていた河口が、アルン社の港になった。住民は水路を手で掘ったが、水深が浅く、潮の関係で漁の時間は限られている。しかも、水路への入り口も狭く、水深も低いので船が岩などにぶつかってしまう。ウジョン・ブラン村の人びとは、アルン LNG 社が建設されてから収入が激減し、とても苦しい生活を送っていると話していた。

このように、日本の責任で困ったり、苦しんだりしている人びとがいることを、わたしは知らなかった。しかし、このような問題を知り、わたしは自分に何ができるか深く考えたがまったくわからなかった。わたしは、おもに日本が貧しい国々を支援していたり、青年海外協力など JICA（国際協力機構）ボランティアを送っていたり、いい政策しか聞いてこなかった。しかし、ウジョン・ブラン村の人びとから話を聞き、真実を知って、わたしの考えていた国際協力はすべての人に届いていないことを知った。

日本では国にうそをつかれることや、自分がしていた仕事が次の日になくなって働き先を失ってしまうことは決してないことだと考えていた。しかし、今回わたしが訪れた村では、当たり前のようにそのようなことが起きていた。わたしはもしスタディツアーに行かなかったら、このような問題を、この後の人生で知ることがなかったのかもしれない。しかし、わたしだけがこの問題を知ったところで、チョッ・マンボン村、ウジョン・ブラン村の人びとたちを助ける方法は浮かばなかった。このスタディツアーで一番感じたことは、もっとたくさんの日本人の人びとにこのアチェで当たり前になっている問題について知ってもらいたいということである。

故郷を返して

～日本人が知るべきこと～

水谷 奈津子 (MIZUTANI Natsuko)

わたしたちはロスマウエ工業地帯にあるアルン LNG 社の周辺を訪れた。最初はツアーのプランには組み込まれていなかった。しかし、ロスマウエに着いたとき、佐伯先生が、アルン社建設で土地を奪われた人たちがテントを張り、座り込みをしていたので、いまどうなっているのか見たいと言い、現場を訪れることになった。2015年2月に先生が訪れたときは、1つの大きなテントにみんなで座り込んでいたそうだ。しかし、わたしたちが訪れたときは、道なりに沿って1つ1つテントが続き、テントというよりは、2~3人が入れるような簡素な家が建てられていた。テントは数えきれないほどあった。先生は、問題が深刻化している状況をわたしたちに学ばせるため、この訪問を追加したのだ。事前に予約せずに訪問したが、暖かくわたしたちを受け入れてくれて話を聞くことができた。

自分は聞くことしかできない・・・？

アルン社前でテント暮らしをする住民組織の代表であるスルタンさんに話をうかがった。そこで彼らが、ひどいというよりも、どのように裏切られてきたのかを知った。土地を売却して欲しいというアルン社との話し合いはおこなわれたが、反対する人は逮捕されてしまった。村人たちは、売却するにあたってアルン社側に条件を出したそうだ。新しい家や生計を立てて行くために必要な農作業用の土地。子どもたちの学校、イスラーム教徒である彼らにとって大切なモスク、村人



アルン LNG 社周辺でテント暮らしをする人びと

が集まれる集会場を補償してほしいという内容だ。しかし、けっきょくは移転地が準備されないまま、村人たちは離散した。

さらに「国のために村の土地収用に応じるならならば、子どもたちを日本やアメリカに留学させる」といった条件も、アルン社側からあったらしい。移転に協力すれば、アルン社で村人が働くことでも

きるとも言われたそうだ。しかし、この約束も果たされてはいない。アルン社側がしてきたこんなにもひどい実態に、日本は関わりがあるにも関わらず、わたしたちはそのことを何も知らなかった。政府の仕事だから関係ないのではなく、だからこそなおさら容認してはいけないことだとわたしは思う。何が開発援助なのか。日本は、自分の利益を求めるいっぽうで、村人たちのことを考えてきたのだろうか。ここでわたしが政府のことを批判すると、非国民となるのだろうか。わたしは、ここで採掘、精製された天然ガスをきつつかっていただろう。自分はもしこのエネルギーがなかったら生活に困るだろう。だからといって、裏にこのような事実があることを知らず、お金を払えば電気をつかえる生活を享受してきた。

アチェでわたしは、国際社会の裏をはじめて目の当たりにした。だからといって、村人たちがわたしたちに期待していたとしても、わたしになにかできるわけではなかった。その場でわたしは必死に彼らの訴えを聞くことしかできなかった。しかし、少なくとも、ここで学んだことを帰国して、周りの人に伝えるのが、わたしたちの使命だと思った。

アチェの人たちのために自分ができること

今回のツアーでは、アチェの人たちがなぜ危険を顧みず、独立しようと考えたのかが痛いほど身にしみた。日本の国益のために苦しんでいること。加害者側である日本人として知らなかったことが申し訳なかった。しかし、アチェの人たちは、わたしたちには優しくかった。複雑な気持ちとともに本当の国際協力とはなんであるのか考えた。難しすぎて、いますぐ答えが出ない。

そして自分の知らない世界がたくさんあることも、今回のツアーでは教えられた。いままでは大学の講義や、テレビのニュースで、日本が世界の発展途上国にどのようにして支援をおこなってきたのかを学んできた。2014年のフィリピン・スタディツアーでも、日本がいかに発展途上国のために良いことをしてきたのかを、実際に現地で学んだ。2014年の自分は、「日本の良いことを学べた。税金のつかい道がこうして役に立っていることは素晴らしい。自分も JICA(国際協力機構)などに参加して、役に立ちたい」とばかり考えていた。なぜそのときに、逆に悪い部分はないのか、本当に良いことばかりなのか、失敗例はないのか、と一度も思わなかったのか。フィリピンに住む住民の人に直接支援が役に立っているのか聞かなかったのに、日本は良いことばかりしてきたと信じこんでしまった。

今回アチェで人びとの話を聞き、援助を受ける地域の住民の立場から考えることができた。立場が違うと、見方も違う。いま思うと、アチェに行く前の自分は考えがまだまだ子どもであり、単純だったと思う。しかし、異なる視点から見える国際協力があることを知り、2014年と2015年では真逆のことを勉強できた。

日本は政府開発援助（ODA）でアチェを支援するとき、なぜアチェの人たちの本当のニーズを考えなかったのか。理想主義すぎると批判を受けるかもしれない。

しかし、わたしはどのようにして日本が贅沢にもエネルギーをつかえているのか、その実態を伝えていくべきだと思う。そして、本当の国際協力とは何なのか、ひとりではなく、みんなで考えるべきだと思う。遠く離れたアチェの人の声を忘れないためにも。

紛争被害を乗り越えて

安井 都々美 (YASUI Tsuzumi)
田中 将平 (TANAKA Shohei)

紛争の犠牲者は民間人

アチェは2005年まで、紛争下におかれていた地域である。1976年、自由アチェ運動という組織が、インドネシアからの独立を宣言し、これに対し、インドネシア政府は武力で押さえつけようとした。インドネシア軍による軍事作戦では、多くの人々が殺害され、そのほとんどは民間人であった。30年間の紛争中、インドネシア軍によって、非常に理不尽で、恐ろしい暴力が行使されていた。紛争の背景には、1970年代からはじまった天然ガスなどの開発の利益が、インドネシアの中央に吸い上げられてしまい、地元アチェには還元されないというアチェの人びとの不満がある。アチェの人びとはまた、19世紀末にオランダ植民地支配に最後まで抵抗したという誇りももっていた。

紛争の話をする女性たち

わたしたちは、北アチェ県クタ・マクムル郡グハ・ウレ村という村で、実際に紛争の被害を受けた女性の話聞いた。家々は森のなかにあり、道路はコンクリートで舗装されておらず土だった。

村では3人の女性から話を聞いた。女性たちの夫は、自由アチェ運動のメンバーだと疑われた人びとだ。インドネシア軍は、自由アチェ運動のメンバーが潜伏していることを疑い、村で軍事作戦を展開した。自由アチェ運動とまったく関係のない民間人も、その軍事作戦の被害を受けたという。

女性たちの夫もインドネシア軍に連行された。ひどい拷問を受け殺害されたり、いまでも行方不明のままだったりする。幸いにも生きて帰ってきても、拷問のトラウマで精神障害に苦しむ人もいたそうだ。

子どもたちもまた被害を受けた。突然インドネシア軍の兵士が家に来て、子どもたちにひどい暴行を加えたのである。女性たちがそれを止めようとする、



紛争で夫を亡くした女性たちから話を聞く



女性たちからお菓子づくりを習う

自動小銃を向けてきたそうだ。それに抵抗することはできず、毎日のように暴行を受けたと、女性たちは話していた。

いつ、インドネシア軍の兵士がやってくるかわからないので、恐ろしくて、夜も眠ることができなかったそうだ。

女性たちの話は、衝撃的なものばかりだった。10年前までこのような状況だったとは信じられなかつた。

彼女たちの話を、わたしたちは食い入るように聞いた。

ティハワさんは、1990年に夫がインドネシア軍に連行された。夫は、殺されず帰ってきたそうだが、その代わりに多くの拷問を受けていた。背中にはナイフで切られた傷があり、ペニスに電気ショックをかけられたという。インドネシア軍から解放されたあとは、精神障害に陥り、いきなり大声を出して走り回ったりしていたそうだ。今も拷問のせいで、仕事もできない状態だという。

次のマリアニさんは、1990年に夫が自由アチェ運動のメンバーだと疑われ、インドネシア軍に連行された。夫は、自由アチェ運動のメンバーはなかったのに殺されてしまったのだという。当時アチェでは、自由アチェ運動のメンバーと同じ名前というだけで、民間人でも殺された。もしくはインドネシア軍が家に来たとき、父親がいなければ家族全員が殴られという。子どもであっても、10歳以上ならば殴られた。マリアニさんの夫が殺害された14年後の2004年に、マリアニさんの息子もインドネシア軍に連行され、殺された。紛争中は近くで爆発音や、銃声が鳴り響く状態だった。マリアニさんは、その紛争のせいで心臓病になったという。

3人目のフディアさんは、朝の4時にインドネシア軍が家に来て、そのまま夫が連行され、いまも行方不明である。夫が連行されたとき、必死にフディアさんも必死についていこうとしたが、インドネシア軍に制止されたという。

夫が拉致された女性たちは、生計を立てるために、朝3時ごろに起き、お菓子をつくり、それを街の市場に売りに行くといった仕事をしてきた。紛争中はとても夜中に歩けるような安全な状況ではなかった。

2005年に和平が結ばれ、紛争は終結した。彼女たちも前向きに生きようと思っているが、紛争で子どもや夫を失った事実がなくなるわけではないため、悲しみはいまも続いているのである。

紛争を体験したゲリラ兵

わたしたちが会ったなかにも、自由アチェ運動に参加した人がいた。わたしたちの運転手をしてくれたザイナルさん。いま車の運転手をしながら、アブラヤシを育て生計を立てている。彼は、多くの親戚がインドネシア軍に殺害された。アチェの独立のために声をあげただけなのに、人びとが殺される必要はない。インドネシア政府に怒りを感じ、アチェ独立を支えたいという理由で、自由アチェ運動に参加したそうだ。息子が自由アチェ運動に参加していたため、彼の父親も軍に連行されたことがある。

ザイナルさんは、アチェの独立のために闘うことは正義であり、そのために死ぬことは聖なる死だと思っていたそうだ。しかし、紛争が終わった現在、紛争後の支援で、自由アチェ運動のトップだけが豊かになっていることに疑問をもっている。ザイナルさんは、多くの方が亡くなり、多くの方が悲しみ、得たものより失ったものの方が多かったと感じていた。

アチェ紛争と日本

紛争の被害に遭った女性たちは、夫が殺されるなど、つらくて話したくないであろう話をしてくれた。わたしたちは、やるせない気持ちでいっぱいだった。彼女たちから話を聞いたわたしたちは、何ができるだろうか。

実は、アチェの紛争は、日本と無関係ではない。冒頭で述べたとおり、アチェの紛争の背景には、天然ガス開発の利益がアチェに還元されなかったことへの不満があった。この天然ガス開発を支えたのが日本である。

日本の政府開発援助（ODA）で建設されたアルン LNG 社は、村の人びとから土地を収用したり、漁民の生活を困難にしたりしただけではない。紛争中、このアルン社の敷地内に、インドネシア軍の特殊部隊が基地をつくり、民間人を拷問したり、殺害したりしていたそうだ。アルン社は、このようなインドネシア軍に対して、警備料という名目でお金も渡していた。

日本は、発電のために、アルン社の液化天然ガス（LNG）を輸入してきた。

わたしたちが払った電気代が、アチェの人びとを拷問したり、殺害したりするインドネシア軍の警備料としてつかわれたかもしれない。知らず知らずのうちに、自分たちが加害者になってしまう可能性があることを、もっと多くの人に知ってもらいたいと思った。

☆女性たちがつくっていたお菓子☆

▼ティンパン・バロン

水に小麦粉を溶かしたものをクレープのように薄く焼き、そのなかに卵と砂糖でつくったスリカヤジャムやココナッツを入れ、巻いて食べるお菓子である。生春巻きのような見た目だが、なかのココナッツがとても甘く、辛いインドネシア料理を食べたあとにはおススメの一品である。

《レシピ》

- ①小麦粉を水で溶かす。
- ②フライパンに油をひき、薄く焼く。
- ③焼けた生地の中に、スリカヤジャムや、ココナッツを包む。

▼ピサン・ゴレン

バナナに小麦粉をつけて、揚げたお菓子である。熱することで甘味が増して、とても食べやすい一品である。

《レシピ》

- ①小麦粉と水を混ぜる。
- ②バナナの皮をむき、3本の切り込みを入れる。
- ③の生地を付けたバナナを高温の油できつね色になるまで揚げる。

▼バワン

細かく刻んだパクチー、ニンジン、キャベツを小麦粉に入れ、ニンニク、コショウ、マカダミアナッツをミキサーにかけ、油で揚げた料理である。お菓子というよりかき揚げのようなものであった。実際にバワンづくりを経験したときには停電になってしまったため、ミキサーをつかうことができず、伝統的な石臼ですり潰してつくった。

《レシピ》

- ①ニンニク、マカダミアナッツ、コショウをすりつぶす。
- ②キャベツ、ニンジン、パクチーを千切りにする。
- ③水で溶いた小麦粉の中に、①と②とコンソメ、塩ひとつまみを入れる。
- ④丸くし、きつね色になるまで揚げる。

* * *

現地で紛争の話を聞いて

～アチェの苦しみ～

田中 将平 (TANAKA Shohei)

わたしたちは、紛争の被害にあった女性たちの話を聞いた。想像を絶するほどの体験を聞き、怖かったのと同時に悲しくなった。

女性たちに、伝統のお菓子づくりを教えてもらった。

女性たちがお菓子を売りに行っているあいだに、家にいる子どもたちが、兵士に暴行を受けたと聞いた。本来国民を幸せにするのが仕事で義務である政府や軍が、なぜ国民が幸せに生活できるようにしないのか疑問に思った。

政府にとって、自由アチェ運動という組織がどれだけ邪魔な存在だったかは、わたしには理解できていない。しかし、どのような理由があっても関係ない人びとを紛争に巻き込んでまですることではないと思った。

自由アチェ運動のメンバーだと疑われた人は、兵士に連行されて理不尽にあらゆる拷問を受けた。その拷問の内容は気軽に話せないほど、残虐で鳥肌が立つほどだった。当初、村を訪問してお菓子づくりをするという話を聞いていたために、少し、軽い気持ちになっていたけれども、お菓子づくりの裏側で起きている話を聞いて、非常に悲しい気持ちになった。

わたしたちには想像もできないほど壮絶な過去を話してくれた村の女性たちは、本当に強い心をもっている人だと思った。もしも自分がこんな壮絶な体験をしていたらまず人と関わりたくないだろう。そんな体験をしていたとしても、わたしたちのような見知らぬ外国の学生に、警戒もなく心を開いてくれて本当に感謝している。

わたしは、海を越えたところには、苦しい生活を余儀なくされている人や、恐ろしい目にあつた人がたくさんいるのだと、小さいころから周りの大人に言われ続けたり、テレビなどで伝えられたりしてきた。日本で生活をしているとそうしたことはまったく想像できなかったけれども、今回アチェの人びとから、テレビのニュースでは聞けないような話を聞くという貴重な体験ができて、非常に印象に残った。

実は裏で日本も少し関わる話があった。日本がおこなった天然ガス開発への援助や、和平後の復興援助である。和平後の援助では、被害をほとんど受けていない人たちが支援を受けていて、本当に被害を受けた村の人たちにはあまり届かなかった。そして、自由アチェ運動の幹部の人たちは支援を受けて豊かな生活を送

っているが、最前線に立って必死に抵抗して頑張った人たちは、支援を受けていないという。

このような話を聞いて、日本はこのままでよいのだろうかという疑問に思った。現在、日本は世界から見て経済的にトップレベルであり、比較的貧困も少ない。戦争も放棄しているのも、非常に平和で恵まれていると思う。けれどもこうした日本の立場は、アチェのような弱い立場の地域を踏み台にしているのではないだろうか。それはほかの国や地域でも言えることだ。そうやって成長した国は、日本以外にもおそらく多く存在しているはずであろうし、世界の格差について、いま以上にわたしたちは勉強していかなくてはならないと感じた。

日本も第二次世界大戦で敗戦したときに一度弱い立場になり、アメリカの言いなりになっていた時代があったはずだ。そのような体験があったはずなのに、その体験が活かされていないことに疑問を感じた。

今回のスタディツアーでは、世界の現状を知るのが大切だと知った。そしてさらに、国々の歴史、文化、そして日本との関わりを勉強することが非常に大切なことだと感じた。

傷つけられた心

～アチェ、紛争について～

安井 都々美 (YASUI Tsuzumi)

紛争が起きた背景

インドネシア・スマトラ島の北西端アチェ州で、分解独立を求める武装ゲリラ兵の自由アチェ運動と中央政府との紛争が起きた。マラッカ海峡に面した土地であるアチェは、天然ガスなどの天然資源は豊かだが、開発の主導権を掌握しているインドネシア政府に利益を吸い上げられてきた。工場建設のために、地元住民の土地や家なども奪われてしまった。移住を余儀なくされた住民への補償も未解決である。

わたしたちは、この紛争のおもな原因の一つでもある天然ガス工場が建設される際に、家を奪われた人たちに会いにいった。そこで目にしたのは、家と呼べるものではなく、道のわきに木やビニールシートをつかって簡単につくられたテントだった。1970年代、工場の建設によって、彼らの暮らす4つの村は消滅した。しかし、移転先を準備されなかったために、彼らは離散しなくてはならなかったという。紛争が起きた背景には、アチェの人びとを豊かにすることのなかった開

発があることを知って驚いた。

そしてわたしは、このことに日本人が関係していることを知り、日本人のひとりとしてショックを受けた。アチェの人びとがこんなに苦しんでいるのに、インドネシアも日本も責任感が欠けていて、当事者であるアチェの人びとの気持ちをなにも考えていない。あつてはいけないことだと思う。

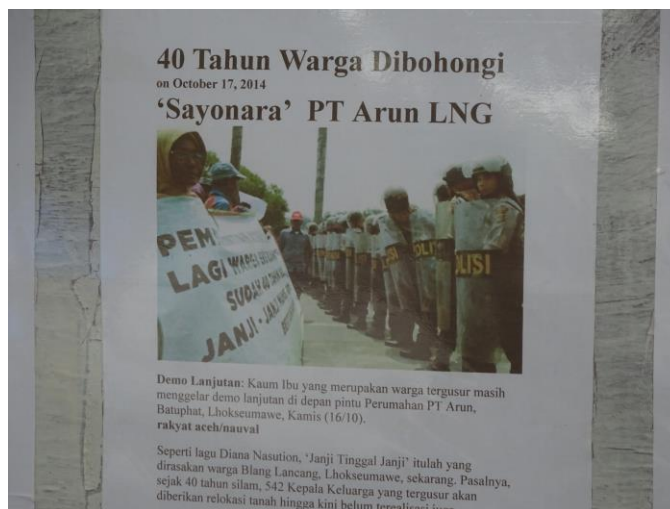
実際に現地を訪れて、日本人がしてきたことを知らなかった自分が恥ずかしかった。また、わたしが話を聞いて知ったところで、アチェの人びとに土地や家、畑を返してあげられない。もどかしい気持ちでいっぱいだ。日本人のひとりとして、わたしが日本に訴えたいくなった。アチェの人びとにふつうの暮らしができる場所をきちんと返すべきだ。インドネシアも日本も協力して、アチェや村の人びととの約束を一刻も早く守って欲しい。

そして、このような仕打ちを受けたアチェの人びとからすればインドネシアから独立したくなる気持ちも当然だ。住む場所を奪われ、約束されていたものが守られておらず、住む場所も土地も畑ももらえないうえに、紛争中だったからと、インドネシア政府に殺される恐怖から訴えることができない状態が続いていたのである。

紛争で苦しめられた女性たち

わたしは紛争を経験した女性たちの話を聞くまでは、紛争中であろうとなぜインドネシア政府を訴えないのだろうかと疑問に思っていた。しかし、紛争はわたしが思っていたものよりも残酷で、想像をはるかに超えるものであった。夫がインドネシア軍兵士に連行された場合、その後は帰ってこられない人がほとんどだった。普通の民間人だったとしても、村のなかで自由アチェ運動の人が見つからなければ、代わりに別の誰かが連れていかれて、暴行されたと聞いた。ほかに自由アチェ運動の関係者はいないかと聞かれ、知らないと言っても聞いてもらえずに、殺されてしまった。なかには、妻と子どもの元に戻って来ることができた男性もいたが、彼は火傷の跡があり、体中が傷だらけだったという。殴られる、蹴られるのは当たり前で、働くこともできないくらいに拷問を受けていた。

被害を受けたのは、この家族だけではない。夫を亡くして、朝早くから働きに



「40年間、住民はウソをつかれた
サヨナラ、アルン LNG 社」

出ていた妻は、爆弾や銃声の音が怖くて外に出られなかった。家に帰れば、インドネシア軍が来て、自由アチェ運動の関係者を探すために自分や息子が殴りつけられる。妻も子どもも暴行を受けていた。何度も何度も暴行を受けたために、心臓病にまでかかってしまった人もいた。こうした恐怖を誰にも訴えることができなかったという。

男性たちはいつもインドネシア軍の標的にされ、木に上って寝たり、村を離れて過ごしたりしていた人もいた。夜中に木に上らされ、下で銃を構えたインドネシア軍兵士に上れなかったら殺されると脅されたり、下着だけになれと命令されたり、肉体的・精神的な苦痛を受けていた。インドネシア軍が村に来たことが耳に入ると、それだけでアチェの人びとは怖くて震え、トラウマにまでなっていた。

女性たちは、いまでは、平和になったし昔のことは考えていないと言っていた。田んぼに行くときも脅されることはなく、安心して寝られると話をしてくださった女性たちは微笑んでいた。わたしにとっては、話を聞いていて耳をふさぎたくなることばかりだった。どれだけ辛かったことだろうか。どれだけ苦しんで生活してきたのだろうか。わたしの想像をはるかに超えた紛争は、一生繰り返してはならないことだと改めて感じさせられた。

インドネシアに行く前は、インドネシアのことを何一つ知らず、紛争が起きていたことすらも知らなかった。しかし、今回スタディツアーに参加して、日本では考えられないできごとが、インドネシアでは身近に起きてきたことがわかった。これは発展途上国と先進国の生活の豊かさの違いでもあるのかもしれない。国が豊かでないと貧富の差が発生するため国民たちの不満が紛争へと繋がったと考える。

支援の裏側

～闘い続けるアチェの人びと～

山本 泰裕 (YAMAMOTO Yasuhiro)

訪問先の人の人柄

2015年8月23日、北アチェ県の村落を訪問した。1976年～2005年のあいだに起きたアチェ州とインドネシア政府との紛争の体験談を聞くためであった。訪問する前は、紛争によって多くの家族や、親戚が殺されていると聞き、村人にどのような態度で接すればいいのか、自分は少しかしこまっていた。しかし、村人たちは、わたしたちをフレンドリーに、そしてとても暖かく迎えてくれた。

日本の自己満足か

素敵な街があり、素敵な人がいるアチェは、その反面で多くの問題も抱えていた。1つは2005年の和平合意で終結した紛争である。この紛争では、過激な軍事作戦により多くの人びとが亡くなった。どうしてこうになってしまうのか、どうしてもっといい解決策がなかったのかと、悲しい気持ちでいっぱいだ。

もともとこの紛争は、日本の政府開発援助（ODA）が原因の1つだと思う。日本が大きな天然ガス精製工場を設立したために、このような大きな問題が発生したのである。個人的な意見として、2014年のスタディツアーでは、多くのボランティア団体や、開発をおこなう会社を見学してきたし、そのときはいつかこのような発展途上国の人たちに貢献する仕事をしたいと思っていた。しかし今回のスタディツアーでは、実際に開発を受けた村へ行き、その村では開発によってどんな利点があり、どんな不利な点があるのかを実際にこの目で見る事ができた。

わたしは、フィリピンでODAに携わる人、インドネシアでODAによる開発の影響を受けた人と会い、それぞれ感じ方が違うことを学んだ。たとえば、ODAの支援を受けて、ある発展途上国に井戸を建設したとする。ODAに携わる人は、井戸が建設されたことに満足するかもしれない。しかし、そこにできた井戸からは汚い水しか出ないものだった場合、村人にとってはまったく意味のないものになってしまう。

多くの人に出会い、多くの人意見を聞くことが必要であり、ODAを発展途上国に供与した結果、どんな問題が発生するのかを考えて開発すべきであると感じた。そしてこの報告書を読んでいる人にも、開発をおこなった場合の利点とリスクがあることを忘れてほしくない。

アチェのために戦った戦士

アチェではすでに現在紛争は終結している。しかし、いまだに解決されていない問題が多くあり、いつまた紛争が勃発してもおかしくないと感じる。わたしたちのドライバーであったザイナルさんは、元自由アチェ運動のメンバーのひとりである。ゲリラ活動のために森に潜み、何度もインドネシア軍兵士に出くわして銃撃戦も経験した。彼から聞いた話は、さすが元ゲリラ兵と思うほど、当時の銃撃戦の様子などがリアルに表現されていた。彼は静かな性格の男性に見え、とても元ゲリラ兵とは思えない。しかし、彼も軍事政権により親戚を殺された被害者のひとりである。

いつ死んでもおかしくない闘争に参加した彼に、なぜ殺されるリスクを背負ってまで、自由アチェ運動に参加したのかを尋ねてみた。彼によれば、やはり不平等なインドネシア政府のもとから独立するためだったそうだ。そのとき、本当に彼が地元を愛しており、大切にしているのだと感じた。



女性たちと一緒に

もうひとつ紹介したい彼の言葉がある。それは、死ぬことは怖くないのかと聞いたときの彼の答えである。「死ぬことは怖いですが、アチェの独立のために命を落とすのは聖なる死だから惜しまない」と彼は話してくれた。しかし、ザイナルさんはこのような考えが間違っていたと続けた。アチェのために命を懸けて戦い、紛争が終結したあと、結果として残ったものは何もなかったからだという。

このように問題を武力で解決しようとしたインドネシア政府に、わたしはとても憤りを感じている。

本当の支援とは

日本だけでなく先進国は今後、途上国に支援をした結果、どのような問題が発生するリスクがあるのか、それによって、どのような人がどのような被害を受けるのか考えなければならない。多くの国で支援活動がおこなわれている現在、もう一度支援とはどのようなものか考え直すべきではないだろうか。そして、わたしは今後もアチェの人びとと関わるひとりとしてもっとアチェについて調べ、今後のアチェの明るい未来をつくるひとりとして生きていきたい。

ロヒンギャ難民との出会い

～アチェから学んだこと～

杉本 萌 (SUGIMOTO Moe)

アチェと難民

わたしたちがアチェを訪れる直前の 2015 年 5 月、数千人のロヒンギャ難民が、船に乗って漂流しているところを発見されるという報道があった。このロヒンギャ難民の一部がアチェで保護されており、わたしたちは 8 月 24 日、北アチェ県で唯一のロヒンギャ難民キャンプを訪問した。

ロヒンギャとは、ミャンマー（ビルマ）のラカイン州北部に住むイスラーム系少数民族だ。人口は約 80～100 万人で、ミャンマー政府は、ロヒンギャを国の構成民族と認めず、国籍を与えていない。ミャンマーで国民として認められず、迫害を受けているロヒンギャの人びとは、保護をもとめてバングラデシュ、パキスタン、タイで暮らしている。

わたしたちが、ロヒンギャ難民キャンプを訪れたのは、かれらが保護されてから 3 カ月たった時期だ。ロヒンギャの人びとは、1 年間このキャンプで保護されると政府から約束されていた。

生活に必要な食糧は、国際移住機関（IOM）が援助している。IOM とは、世界的な人の移住に取り組む国際機関で、移住と開発、移住の促進、移住の管理行政、非自発的移住の 4 つの課題に取り組んでいる。IOM の前身は、1951 年にヨーロッパからラテンアメリカ諸国への移住を支援するために創立された欧州移住政府間委員会だ。この欧州移住政府間委員会は、活動の幅を徐々に世界へと拡大し、1980 年に移住政府間委員会、1989 年 11 月に現在の国際移住機関となった。ちなみに、ロヒンギャの人びとは、アチェの人より辛い食べ物を好むそうだ。

食糧以外は、市民社会が援助している。ロヒンギャの人びとが生活する建物は、対策緊急行動（ACT:Aksi Cepat Tanggap）という団体が建てたものだ。ACT とは、2005 年に創立されたインドネシアの人道支援組織だ。



ロヒンギャ難民キャンプにて

緊急支援、災害後の復興プロジェクトなどにたずさわっている。

建物は長屋式で、1家族ごとに部屋が用意されていた。1部屋に約4～5人が生活する。イスラーム教徒であることを配慮して、男女はしっかり区別される。実際に生活する部屋を訪問したところ、とても狭かった。建物の警備は、警察が担当していた。

難民が暮らす建物のほかに、幼稚園、モスク、クリニックなども用意されている。幼稚園では、折り紙、絵、インドネシア語、アチェ語の勉強がおこなわれているという。ロヒンギャの人びとは、ミャンマーでは、礼拝すら許されない状況であった。いまでは、モスクがあり、コーランの先生もいるため、状況が大きく改善された。

キャンプでの避難生活が始まった当初は、赤ちゃんがいる母親にミルクを配給しても、受け取ってもらえなかったそうだ。ロヒンギャの人びとは、それぞれ迫害経験があり、トラウマに苦しんでいる。そのため、「ミルクに毒が入っているのではないか」と疑いをもたれたのだという。

難民キャンプのなかでは、ロヒンギャの人びとがアメリカやヨーロッパの国々で受け入れられ、アチェを離れることになったときに備えて、自立できる訓練もおこなわれている。訓練の内容は主に、言葉や農作物の育て方などだ。

アチェから考える日本の難民受け入れ

日本の難民受け入れ体制は、世界最低レベルだと海外メディアから批判されている。日本が2014年、難民認定したのは11人だ。先進国であるアメリカでは2万1171人、ドイツでは、1万915人、フランスでは9099人、韓国では59人が難民として認められた。

また、日本で暮らす難民の人びとは、わたしたちが当然のようにできている生活ができない。現在の日本では、難民申請中の期間に滞在できる資格を、誰もが保障されるわけではない。日本にいる難民申請者は、病気になった場合でもお金がなく、病院へ行くことができなかつたり、保証人がいないため、住む場所を確保できなかつたり、さまざまな問題を抱えている。

アチェの人びとはロヒンギャ難民を受け入れ、多くの支援をおこなっている。この受け入れの姿勢を世界のモデルケースにしたいということだった。日本は先進国であるのにも関わらず、アチェの受け入れと比べ、難民を受け入れようという姿勢が見えず、難民の扱いもひどいと感じた。日本は先進国であり、わたしたちは便利なものに囲まれて恵まれた環境で生活している。生活が豊かであるのだから、もっと難民受け入れに対して、積極的に支援をおこなうべきであるとの訪問を通じて感じた。

第三章 スタディツアー資料



インドネシア最北西の海を臨む
(サバン島にて)

スタディツアー報告会

わたしたちは、2015年11月11日（水）、白鳥キャンパスのクライン・ホールでインドネシア・スタディツアーの報告会をおこなった。

まず、わたしたちは、パワーポイントをつかい、スタディツアーで学んだことを紹介した。①アチェについて、②バンダ・アチェとサバン島について、③アルムスリム大学との交流、④津波・開発・紛争の被害を受けた村について、そして⑤アチェにいるロヒンギャ難民について報告した。報告が終わると、スタディツアー参加者ひとりひとりが感想を述べ、聴講した人たちから質問を受けた。また、アチェの衣装を着て、アルムスリム大学学生から習った「サマンの踊り」を披露した。

報告会当日にとったアンケートでは、以下のような感想や質問をいただいた。

「インドネシアの食べ物、文化、建物をもっとみたい」

「アチェの衣装について、もっと詳しく意味を知りたい」

「ODAについてもっと詳しく知りたい」

「ロヒンギャ難民についてもっと詳しく知りたい」

「アチェの難民支援が素晴らしい」

「スタディツアーで苦勞したことは何か」

日本とインドネシアの関係を知らない人が多かったので、両国の関係を伝えられてよかった。

練習で苦勞した「サマンの踊り」についても、印象的であったという意見が多く、嬉しく思う。

なにより、わたしたちの報告を聞き、多くの学生がインドネシアに行きたいと回答してくれた。「直接インドネシアを見てみたい、目で直接たしかめたい」「インドネシアの文化にふれてみたい」というのが、その理由だった。スタディツアーに参加してみたいと考える学生が多く、いい報告会となった。



インドネシア スタディツアー 報告会

日時 11月11日(水)

9時10分～10時40分

場所

翼館4階 クラインホール

今年の舞台は大学初となるインドネシア！！

8月17日～28日の12日間

インドネシア・アチェに行ってきました。

開発・紛争・津波の話、アチェの学生との交流
について発表します。



★外国語学部★

国際文化協力学科

★国際文化学部★

国際協力学科

写真コーナー



インドネシアに向けて出発！



さっそくみんなで食事です



インドネシア最西端キロメートル・ゼロ



サバン島からのフェリーで昼食



津波の跡が公園に



陸地に打ち上げられた発電船



ウジョン・ブラン村の漁民たち



港の向こうに見えるアルン LNG 社



アブラヤシの木々



再定住集落の村人たちと



ロヒンギャ難民キャンプで



食事をつくるロヒンギャの女性



アチエのKFCで夕食を



ドリアンで衝撃の体験が！



アチエで同行してくれたみなさんと



いよいよ帰国の途に



クアラルンプールで1枚！



歴史を感じるマラッカにて

おわりに

2015年度インドネシア・スタディツアーは、国際文化学部設置後初めてのスタディツアーとなった。スタディツアー実施にあたっては、学部長を筆頭に学部全体、国際センター、そして訪問先の多くの方がたの多大なる支援をいただいた。スタディツアーを無事に終え、こうして報告書の発行までいたったことについて、まずは心から感謝の意を表したい。

スタディツアーの醍醐味は、国際協力の現場を、実際に自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の耳で聞くことである。これまでの暮らしではなかった新たな出会いや発見は、参加者にとって大きな学びとなるだろう。つまり、スタディツアーに参加すること自体に意義がある。しかし、参加者がどこをどのように歩くのか、何を見聞きするのか、またスタディツアーでの体験や知見を帰国後どのように活かすのか、スタディツアーをより意味のあるものにするためには、事前・事後の学習が不可欠である。

今回のスタディツアーで訪問したアチェ州は、インドネシアのなかでも、歴史、文化、宗教的な特殊性が認識され、さらに内戦や津波を経験した地域である。スタディツアーが、アチェを理解し、国際協力のありかたを考える契機となることをめざし、事前・事後学習はアチェについて学ぶにとどまらない多岐にわたるものとなった。スタディツアー前には、参加者は宗教法人・名古屋モスクを訪問したり、インドネシア料理に挑戦したりした。スタディツアー終了後も、大学の「世界フードフェス 2015」でアチェ料理を披露したり、愛知県に住むアチェ人と交流したり、参加者は教室の外へ飛び出し、日本にいながら異文化を体験しはじめている。スタディツアーにとどまらない国際交流が、参加者のさらなる学習意欲、知的好奇心をかきたててくれると確信している。

スタディツアーのたびに、個人的な課題として残されてきたことがある。それはスタディツアーのもつ「非対称性」だ。先進国である日本に暮らすわたしたちは、途上国の現場を訪れることができる。しかし、途上国の、それもわたしたちが「現場」と考えるような村落部の人びとが、日本に来ることは非常に難しい。今回のスタディツアーでは、この「非対称性」を克服するための第一歩を踏み出すことができた。スタディツアーでお世話になったアルムスリム大学と名古屋学院大学が、2015年12月、学術交流協定を締結したのである。協定は、共同研究、研究成果発表、学生交換など包括的なものとなっており、2016年度には交換留学プログラムが開始される。一方通行ではない国際交流の契機となることを期待したい。

佐伯 奈津子

『アチェの想い—津波・開発・紛争をめぐる過去、現在と未来』

監修 佐伯 奈津子・人見 泰弘

発行 2016年2月

発行機関 名古屋学院大学 国際センター

456-8612 愛知県名古屋市熱田区熱田西町 1-25

TEL 052-678-4093 / FAX 052-682-6824

Report on Study Tour to Aceh, Indonesia 2015 organized by Department of International
Cooperation, Faculty of Intercultural Studies, Nagoya Gakuin University

Edited by SAEKI Natsuko and HITOMI Yasuhiro

February 2016

International Center, Nagoya Gakuin University

1-25 Atsuta Nishimachi, Atsuta-ku Nagoya, Aichi, 456-8612 Japan

TEL +81-52-678-4093

